

仙台市文化財調査報告書第49集

# 仙台市文化財分布調査報告 I

近世社寺建築調査概報  
仙台市郡山の民俗

昭和58年3月

仙台市教育委員会



仙台市文化財調査報告書第49集

# 仙台市文化財分布調査報告 I

近世社寺建築調査概報  
仙台市郡山の民俗

昭和58年3月

仙台市教育委員会

# 序

仙台市教育委員会では、「一度失ったら再び得ることの出来ない先人の築いた知慧の証し、及び大自然の生命の証し」である文化財を保護し、次の世代の人々に継承していくために、小規模ながら毎年文化財分布調査を実施しています。この調査では、現在知られている在仙の文化財（指定文化財のみならず広義でいう文化財）の基本台帳の整備及び管理状況のチェックはもちろんのこと、合せてこれまで私たちには知られていなかった新しい文化財の発見をも目的としています。

今回ここに現在まで行なわれて来た文化財分布調査のうち、調査の終了した古建築部門・民俗部門の一部について報告書にまとめることになりました。この調査を実施するにあたっては当該文化財所有及び管理者をはじめ、数多くの方々の御協力を賜りました。この場をかりて心から御礼申し上げる次第です。

なお、当委員会では、文化財保護行政を通じて文化財保護・管理及び、文化財保護思想の啓蒙・普及活動を続けていく所存でありますので、今後とも多大な御指導・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和58年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

教 育 長 藤 井 黎

# 目 次

序

目次

例言

近世社寺建築調査概報	1
緒言	1
調査経過	2
調査結果	2
まとめ	12
資料	18
図版・写真	20
仙台市郡山の民俗	48
はじめに	49
1. 郡山地区の概況	49
2. 講	50
3. 石碑	52
4. 神社・仏閣	54
5. その他	55
表	55
写真	58
地図	61

# 例 言

1. 本書は、仙台市教育委員会がこれまで行なって来た仙台市内の文化財の分布調査の結果を報告書にまとめたものである。
2. 本書は仙台市文化財調査報告書第49号『仙台市文化財分布調査報告Ⅰ』として、「近世社寺建築調査概報」と「仙台市郡山の民俗」の二編を掲載した。
3. 「近世社寺建築調査概報」は、東北大学工学部建築学教室（主任：佐藤巧教授）の協力をいただき、仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係主事渡辺洋一が執筆したものである。
4. 「近世社寺建築調査概報」で使用した図面は東北大学工学部建築学教室にて作成したものを、同教室の許可を得て掲載したものであるし、写真についても当該社寺の好意により渡辺が撮影したものであることから、無断で転載することを禁ずる。
5. 「仙台市郡山の民俗」は、東北学院大学民俗学研究会の協力をいただき、仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係主事山口宏が執筆したものである。
6. 本書の編集には、渡辺・山口があたった。

# 近世社寺建築調査概報

# 近世社寺建築調査概報

## 緒 言

仙台市教育委員会では、毎年仙台市内にある文化財についての基本台帳の整備、及び新しい文化財の発見を目的とした文化財分布調査を実施しており、古建築については昭和53・54年度の二ヶ年にわたり一応の分布調査は終了した。

ところで、今年度文化庁建造物課の指導により、宮城県全県にわたって近世社寺建築緊急調査が行なわれることになった。この調査の目的は、近世つまり桃山・江戸時代(1573~1867)に建立された社寺建築(神社・寺院・霊廟等の建造物)の実数をつかむこと、またその中には建立後300年近く経過しているところから破損が進んでいるものも多いと考えられ、早急にその実態を把握し、重要なものについては保存の措置を検討するための基本資料を作成することにある。

この調査は全県的な規模で行なわれるため、調査主体はあくまで宮城県教育委員会(担当文化財保護課)であり、調査方法は、まず準備調査として調査対象の社寺建築のリストの作成を行ない、次いで第一次現地調査としてそのリストに基づき内容の調査を行ない、一次調査の結果より重要と思われる物件100件前後について精査(実測図の作成を含む)を行なうというものである。このうち、準備調査・一次現地調査については各市町村が、二次現地調査は県より委託された東北大学工学部建築学教室(主任:佐藤巧教授)が実際に行なうというものである。仙台市分については仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係が担当することとなり、準備調査、一次調査は当委員会が主体で、二次現地調査は東北大学工学部建築学教室と合同で行なうことになった。

そこで、当委員会ではこれまで行なって来た分布調査の資料に基づき、今回改めて在仙の社寺建築の調査を実施し資料の充実をはかり、分布調査の結果と合せてここに報告することにした。なお、東北大学工学部建築学教室と合同で行なった二次現地調査の報告は宮城県教育委員会より全県的な規模で報告が為されるので、ここでは当委員会が主体で行なった一次現地調査までを中心として報告することにする。

この報告書を作成するにあたり仙台市文化財保護委員会副委員長佐藤巧東北大学教授の御指導をいただくとともに、次の方々に御協力をいただいた。心から御礼申し上げる次第である。

東漸寺・輪王寺・寿徳寺・正楽寺・成覚寺・龍泉院・善敬寺・孝勝寺・松音寺・大年寺・大法寺・称念寺・大満寺・昌繁寺・落合観音奉賛会・仏眼寺・満福寺・泰心院・大梅寺・善入院・大林寺・善導寺・清浄光院・仙岳院・莊巖寺・陸奥国分寺・善応寺・延寿院・大願寺・瑞鳳寺・誓渡寺・冷源寺・宝善寺・徳照寺・専能寺・愛宕神社・熊野神社・仙台東

照宮・白山神社・松尾神社・羽黒神社・生出森八幡神社・榴岡天満宮・八幡神社(飯田)・八幡神社(坪沼)・五柱神社・大崎八幡神社・宮城県神社庁・宮城県総務部総務課宗教法人係・宮城県教育委員会文化財保護課・東北歴史資料館・仙台市博物館・東北大学工学部建築学教室・大石直正東北学院大学教授

## 調 査 経 過

### 1. 準備調査

期 間 昭和57年3月15日～同年4月19日

調 査 員 渡辺洋一

調査補助員 岡崎修子・伊藤民子・阿部美恵子

調 査 概 要 仙台市内に現存する社寺数を把握し、その中から今回の調査対象となる物件のリストを作成。

### 2. 第一次現地調査

期 間 昭和57年5月31日～7月13日

調 査 員 渡辺洋一 山口宏・渡辺忠彦・佐藤裕・成瀬茂

調査補助員 長久保孝徳・栗崎一技・阿部美恵子

調 査 概 要 準備調査により作成したリストに基づき対称物件全てについて調書を作成<sup>(2)</sup>

### 3. 第二次現地調査

期 間 昭和57年8月26日～同年9月12日

調 査 員 主任：佐藤巧東北大学教授

阿部和彦助手・飯渕康一助手・田中正三技師・小山祐司・大竹伸一・中山和彦・小野里忍・奥山隆明・木立 享・越山光宏・長岡和裕・西堀正樹・向山 徹  
渡辺洋一・山口宏

調 査 概 要 一次調査で作成した調書からより重要と思われる物件十数件について実測図作成を含めた精査。

## 調 査 結 果

まず準備調査により現存する在仙の社寺数が243ヶ所（うち寺院が162ヶ寺、神社が81社：宮城県総務部総務課調べ：昭和57年2月1日現在）で、このうち寺院で35ヶ寺の53件、神社で11社の12件の合せて65件が今回の調査の対象になることがわかった。<sup>(3)</sup>

そこで、そのリストに基づき第一次調査を実施したが、その結果は次のとおりである（表1・表2）。<sup>(4)</sup>

表 1. 第一次現地調査一覧表(寺院)

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
東漸寺	浄土真宗 大谷派	仙台市南鍛冶町58	本堂 山門	明和4 (1767) 寛政2 (1790)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺入母屋造屋根を有する5間×4間(17.5×16.5m)の仏堂で、一間の向拝が付く。</li> <li>○棧瓦葺切妻造屋根を有する櫓門形式の八脚門(三間一戸、扉なし)。</li> <li>○二階部分は鐘楼となる。</li> <li>※寺は享保12年(1728)、明和元年(1764)の二度にわたる火災で堂宇が一切焼失し、現存の堂宇はその後に再建されたものである。</li> </ul>	57.5.31
輪王寺	曹洞宗	仙台市北山一丁目14-1	山門	元禄4 (1691)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(7.15×3.75m)の八脚門で、左右に仁王像(寺伝では灌慶作)が安置。</li> <li>○仙台藩四代藩主伊達綱村の造営。</li> <li>※寺は藩政時代御一門格寺院として慶長7年(1602)及び、元禄4年の二度にわたり大造築が行なわれ、仙台領内曹洞宗四叢林の一として大伽藍を形成していた。しかしながら、明治9年3月5日に発生した野火により現存の山門以外の堂宇は尽く焼失した。</li> </ul>	57.6.2
寿徳寺	曹洞宗	仙台市国見一丁目15-1	山門	慶応2 (1866)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺切妻造屋根を有する一間一戸(2.7×1.8m)の薬医門で、観音開きの扉が付く。</li> <li>○一間の通用口が円形になっているところから別名円門と呼ばれる。</li> <li>○昭和35年5月に破損部分の修復がなされた。</li> <li>※寺は明治以降2度の火災にみまわれ、山門以外の堂宇は全て焼失した。</li> </ul>	57.6.2
王楽寺	浄土真宗 (単立)	仙台市新寺二丁目6-35	本堂 山門 法宝蔵	享保5 (1720) 寛保2 (1742) 安政5 (1858)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺(一部本瓦葺)入母屋造屋根を有する9間×9間(22.4×20.0m)の仏堂で三間の向拝が付く。</li> <li>○元米屋根は全て本瓦葺で、外廻の廻廊部分はぬれ縁となっていたものと考えられる。</li> <li>○同寺門徒、高田屋六之丞他5人の寄進。</li> <li>○棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(8.1×3.05m)の櫓門形式の八脚門で、元米二階部分は鐘楼となっていた。</li> <li>○二代高田屋六之丞の寄進。</li> <li>○元米切妻屋根を有する1間×3間(3.6×4.5m)の土蔵造の二階蔵。</li> <li>○昭和34年の修復により外部を凝灰岩で囲い、内部も柱組みをのぞき板張りするなど相当手が加えられている。</li> <li>○同寺門徒、高橋藤七の肝入で建立。</li> <li>※寺は、宝永5年(1708)春の大火により同寺伽藍を尽く焼失し、その後同寺門徒の寄進により再建される。</li> </ul>	57.6.3

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
成覚寺	浄土宗	仙台市新寺三丁目10-12	山門	貞亨4 (1687)	<p>○棧瓦葺一間一戸(2.75×1.35m)の向唐門で、観音開きの棧唐戸が付く。</p> <p>○元来は総体黒漆塗であったが、現在は黒漆部分はとび、下地の朱漆が出、所々は木地も露出している。</p> <p>○本来は、浄眼院(仙台藩三代藩主伊達綱宗側室三沢初子)霊屋門として作られたもので、明治初年に同寺山門として移築。</p> <p>※寺は宝永5年(1708)、享保12年(1728)の二度の火災で堂宇は尽く焼失し、明治以降の復旧で、寺院の面目を一新している。同寺山門もその折に移築された。</p>	57.6.4
龍泉院	曹洞宗	仙台市新寺二丁目3-38	本堂	明和7 (1770)	<p>○元来棧瓦葺寄棟造の二重屋根を有する5間×5間(11.5×9.55m)の仏堂に一間の向唐破風の向拝が付いたものであった。</p> <p>○明治初年に屋根が二重から一重に修復され、その後、堂後部に3間×2間(7.65×2.4m)の開山堂が、昭和40年代には向って左側に1間×5間(2.4×9.55m)の増築がなされ現在に至る。</p> <p>○寺は享保12年(1728)、明和元年(1767)の火災で堂宇が焼失し、その後の再建である。なお、現本堂に関する資料は寺にはなく、建立年代その他については、昭和22年7月に故小倉強博士を中心とした北匠会の調査の結果提示されたものである。</p>	57.6.4
善敬寺	浄土真宗 本願寺派	仙台市坪沼字寺山1	本堂 山門	天保8 (1837) 安政2 (1855)	<p>○棧瓦葺入母屋造屋根を有する5間×6間(11.45×11.5m)の仏堂に一間の向拝が付く、</p> <p>○棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(5.7×1.4m)の薬医門で観音開きの扉及び袖塀が付く。</p>	57.6.5
孝勝寺	日蓮宗	仙台市東九番丁55	釈迦堂 山門	元禄8 (1695) 江戸後期	<p>○本瓦葺方形造屋根を有する3間(7.05m)四方の仏堂で、一間の向拝が付く。</p> <p>○仙台藩四代藩主伊達綱村が生母三沢初子の菩提を弔うため榴ヶ岡に建立したものの。</p> <p>○昭和48年宮城県立図書館建設の際孝勝寺本堂わきに移築。</p> <p>○本瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(6.7×3.2m)の薬医門で、観音開きの扉が付く。</p> <p>○寺伝によると仙台城の城門を移築したとある。</p> <p>※寺は、日蓮宗東北総本山として藩政時代は大伽藍を形成していたが、享保12年(1728)、明和元年(1764)、嘉永6年(1853)等の数度にわたり堂宇は焼失をくりかえし、現在の堂宇は、山門をのぞき、全て近代以降の建立である。</p>	57.6.6

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
松音寺	曹洞宗	仙台市新寺四丁目6-28	本堂 山門	弘化4 (1847) ?	<p>○ 棧瓦葺寄棟造7間×5間(13.65×10.55m)の仏堂と一間の千鳥破風の向拝が付く。</p> <p>○ 元来は屋根は萱葺であったもので、昭和20年代後半に現在の形に改修された。</p> <p>○ 棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(5.95×3.05m)の薬医門。</p> <p>○ 寺伝では、若林城の城門を寛永16年(1630)に拝領したものとされる。</p> <p>※ 同寺は元来、現連坊小学校の地にあり、明治初年の火災で同寺が焼失後同末寺長泉寺のあった現在地に移った。つまり、現本堂は元々長泉寺本堂として建立されたものであり、山門については、寺では明治16年頃同寺が現在地へ移った折移築したとしているが詳細は不明。</p>	57.6.6
大年寺	黄檗宗	仙台市門前町3-22	惣門	元禄10頃 (1698)	<p>○ 棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(8.0×2.65m)の薬医門形式をとる。黄檗宗特有の中国風の門(本山黄檗山万福寺の模倣?)。</p> <p>○ 大正14年に修復の記録あり。</p> <p>※ 同寺は藩政時代、黄檗宗日本三叢林の一つとして大伽藍を形成していたが、明治以降寺は荒廃し、廃寺同様となり、近世の建造物としては、惣門を残すのみとなる。</p>	57.6.7
大法寺	浄土宗	仙台市三条町7-27	本堂	寛政7 (1795)	<p>○ 棧瓦葺入母屋造屋根を有する5間×5間(14.65×9.25m)の仏堂で一間の向拝が付く。</p> <p>○ 元来は3間×3間の堂宇であったと思われる。</p> <p>※ 同寺は、慶長13年(1608)に大町に開基。火災焼失後、万治2年(1659)に二代藩主伊達忠宗の灰塚守護寺として再建される。同堂宇は天明4年(1784)の火災にて焼失した後、現堂宇が建立されている。</p>	57.6.8
称念寺	浄土真宗 本願寺派	仙台市新坂町10-3	本堂 山門 鐘楼	文化年間 (1804~'18) 文化年間 江戸後期	<p>○ 棧瓦葺寄棟造屋根を有する7間×7間(14.3×15.35m)に三間の向拝が付く、</p> <p>○ 棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(5.65×2.12m)の薬医門で両側に袖塀が付く。</p> <p>○ 総体朱塗であるところから「赤門」と称される。</p> <p>○ 棧瓦葺入母屋造屋根を有する一間四方(2.4m四方)の楼。</p> <p>○ 寺伝によると文化年間以前に溯る。</p> <p>※ 寺は、藩政時代幾度か火災に会い、堂宇は焼失をくりかえし、現在のものは、江戸後期に建立されたものである。</p>	57.6.8
大満寺	曹洞宗	仙台市向山四丁目4-1	虚空藏堂	万治2 (1659)	<p>○ 棧瓦葺方形造屋根を有する三間四方(8.5m四方)に一間の向拝と四周に</p>	57.6.9

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
					4尺の浜縁が付く。 ※寺は、はじめ龍川院頭塔大満坊として青葉山にあったが、仙台開府の折経ヶ峰へ、仙台藩二代藩主伊達忠宗廟感仙殿の建設に際し、現在の愛宕山に移設される。なお、堂宇は戦災により虚空藏堂をのぞき尽く焼失し、現在の堂宇は戦後の建築である。	
昌繁寺	浄土宗	仙台市新坂町13-1	山門  観音堂	江戸後期  江戸後期	○棧瓦葺切妻造屋根を有する一間一戸(3.75×2.6m)の四脚門で、観音開きの棧唐戸の扉及び、両脇に袖塀が付く。 ○棧瓦葺方形造屋根を有する二間四方(3.65×m四方)の仏堂で、一間の向拝が付く。 ※寺は宝永5年(1708)、天保9年(1838)安政元年(1854)の三度にわたる火災をうけ、また、明治32年の強風による被害をうけ、現存する近世建築は山門・観音堂のみである。	57.6.10
光西寺	真言宗 智山派	仙台市四郎丸字落合	観音堂 (落合観音堂)	寛永4 (1627)	○宮城県指定有形文化財(昭44.8.29指定) ○堂葺入母屋造屋根を有する3間四方(6.25m四方)の仏堂で、一間の向拝が付く。(資料II) ※元来、大善院という修験道の寺院の付属仏堂として建立されたもので、大善院の廃寺後、光西寺付属となる。	57.6.11
仏眼寺	日蓮正宗	仙台市荒町35	本堂  山門	嘉永2 (1849)  嘉永2 (1849)	○棧瓦葺入母屋造屋根を有する5間×7間(15.43×15.43m)の仏堂で、一間の向拝が付く。 ○昭和50年に修理が為され、屋根葺替及び天井の張替が行なわれた。 ○本瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(6.12×2.48m)の薬医門で、観音開きの扉及び、両脇に袖塀が付く。 ※寺は寛永13年(1636)、弘化4年(1847)の火災で焼失し、現堂宇はその後のものである。ただし、本堂は、昭和50年の修理の際、木組に新材(嘉永2年の建立時のもの)とそれ以前のものと思われる古材(焼失したとされる旧本堂の部材か?)とが入りまじっており、焼失とはいえ、旧本堂は半焼しただけで、それを修改築したものであるという推測もなりたつ。 また、その折、文化年間の銘文のある瓦が発見されており、旧本堂は、文化年間に瓦の葺替がなされたということがわかる。	57.6.16
満福寺	真言宗 智山派	仙台市荒町206	山門	寛永20 (1643)	○本瓦葺屋根を有する一間一戸(2.7×1.35m)の平唐門で、観音開の扉が付く。 ○大棟に鴟尾を備える。 ○両脇に袖塀が付き、両方にくぐり戸がある。 ※寺は毘沙門堂の別当であり、同堂は、	57.6.16

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
					明治37年の火災で焼失し、現在のものは大正5年に再建されたものである。	
泰心院	曹洞宗	仙台市南鍛冶町100	山門	文化14 (1817)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本瓦葺切妻造屋根を有する一間一戸(4.18×4.0m)の四脚門。</li> <li>○両脇に花燈窓を有する袖塀(移築時のものか?)が付く。</li> <li>○元来、仙台藩校養賢堂正門として建立され、明治初年に同寺へ移築。</li> <li>○宮城県沖地震(昭53.6.12)により破損したため修理される。</li> <li>○脚底部には装飾が見られる。</li> <li>※寺は享保12年(1727)、明和元年(1764)等数回にわたり火災にあい堂宇は焼失を繰り返す。現堂宇は近年建立されたもので、近世の建築は山門のみである。</li> </ul>	57.6.16
大梅寺	臨済宗 妙心寺派	仙台市茂庭字綱木裏山4	庫裡  開山堂  仏堂 (禪堂)  書院	元禄13 (1701)  元禄13 (1701)  宝暦年間 (1751~'64)  江戸後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○萱葺寄棟造屋根を有する棟入の田字型座敷を有する住宅建築。</li> <li>○柱間は座敷側5間×4間(10.53×9.63m)土間側4間×5間(7.63×9.58m)で座敷妻側に2間×4間の中二階を有する。(資料Ⅲ)</li> <li>○棧瓦葺方形造屋根を有する2間四方(3.03m四方)の仏堂。</li> <li>○昭和6年に現在前にある仏堂(禪堂)と繋げていたが、昭和50年頃、屋根葺替と同時に切りはなし、現在に至る。(資料Ⅲ)</li> <li>○元来棧瓦葺寄棟造屋根を有する3間×4間(5.75×6.70m)の仏堂で、現在は屋根はトタン葺となっている。</li> <li>○元々、寺内の石碑の輪堂的役割をたしていたと思われる。</li> <li>○萱葺寄棟造屋根を有する4間×3間の書院造の建造物で、一部地下式となっている。</li> <li>○元来、仙台藩六代藩主宗村が別荘として造った郷六御殿遺構の一部である。</li> <li>○昭和48年に同寺に移築される。</li> <li>※寺は明治以降無住の時代が長かったため堂宇の破損はひどく、本堂は早々に解体され、近年新築された。</li> </ul>	57.6.17
善入院	天台宗	仙台市原町一丁目1-67	観音堂	江戸中期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺方形造屋根の3間四方(6.24×6.22m)の仏堂で一間の向拝が付く。</li> <li>○木鼻部分は獅子頭及び鶏頭の装飾がある。</li> <li>※この堂は仙台三十三番札所観音第十番札所の観音堂で元来は清浄院(天台宗)が別当であったが、昭和8年に善入院に吸収された。</li> </ul>	57.6.18
大林寺	曹洞宗	仙台市新寺四丁目7-6	本堂	寛政6 (1794)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺入母屋造屋根を有する7間×6間(14.92×11.27m)の堂宇に三間の向拝が付く。</li> <li>○近年、柱組及び装飾部分を除き原型</li> </ul>	57.6.18

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
					をとどめないほど大改修が行なわれた。	
善導寺	浄土宗	仙台市新寺二丁目7-33	本堂 山門	享保20 (1736)  享保20 (1736)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 檼瓦葺寄棟造屋根を有する8間×8間(16.26×16.0m)の堂宇で三間の向拝が付く。</li> <li>○ 本堂北側に位牌堂及び開山堂が付く(後世のもの)。</li> <li>○ 檼瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(6.57×3.02m)の櫓門形式の八脚門。</li> <li>○ 両脇の袖塀は後補である。</li> </ul> <p>※同寺は宝永5年(1708)の火災にて堂宇を尽く焼失し、その後の建立である。</p>	57.6.18
清浄光院	天台宗	仙台市宮町五丁目1-11	本堂	弘化4 (1847)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 檼瓦葺入母屋造屋根を有する6間×7間(12.72×11.78m)の堂宇に二間の向拝が付く。</li> </ul> <p>※寺は元来、仙岳院の念仏道場として、寛文16年に開山したもので、現堂宇は弘化3年の火災焼失後に建立されたものである。</p>	57.6.20
仙岳院	天台宗	仙台市東照宮一丁目1-16	本堂	明和3 (1766)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 檼瓦葺入母屋造二重屋根に一間の妻入の向拝を有する3間×6間(7.91×10.83m)の堂宇。</li> <li>○ 寺は明和2年(1765)の火災により焼失後に再建されたもの。</li> </ul>	57.6.20
莊嚴寺	浄土宗	仙台市新坂町12-1	山門	江戸前期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 檼瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(6.20×2.93m)の薬医門。</li> <li>○ 元来は本瓦葺の武家屋敷の門(伝原田甲斐屋敷門)であったものを移築したものと考えられる。</li> <li>○ 両脇の袖塀は移築時のものと考えられる。</li> <li>○ 柱のほぞの痕跡から、元々四脚門であった可能性がある。</li> </ul> <p>※寛延2年(1749)をはじめ数度の火災により堂宇が焼失している。また、寺の不始末により火災を起したこともあり、その折寺格寺領を没収されたこともあると記録にある。</p>	57.6.22
陸奥国分寺	真言宗 智山派	仙台市木ノ下二丁目8-28	薬師堂 山門  観音堂  鐘楼	慶長12 (1607) 慶長12頃 (1607頃)  延享2 (1745)  江戸前期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国指定重要文化財(明36.4.15:特別保護建造物指定)</li> <li>○ 宮城県指定有形文化財(昭50.4.30指定)</li> <li>○ 萱葺入母屋造屋根を有する三間一戸(7.40×4.23m)の八脚門。</li> <li>○ 両脇に仁王像を安置してあるところから別名仁王門と称する。</li> <li>○ 方形造屋根を有する2間四方(4.27m四方)の堂宇で一間の向拝が付く。</li> <li>○ 外装は全て朱塗で四方に浜緑が付く。</li> <li>○ 現在屋根にはトタンが葺かれている。</li> <li>○ 入母屋造屋根を有する3間×2間(4.79×3.60m)の二階式の堂宇で、現在屋根にはトタンが葺かれている。</li> </ul>	57.6.22

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
					※寺は大部分国指定史跡陸奥国分寺跡(大11.10.12指定)の上に建っており、特に薬師堂・山門は古代の伽藍礎石の上にある。	
善応寺	臨済宗 妙心寺派	仙台市燕沢二丁目3-1	開山堂	宝永元年 (1704)	○仙台市指定有形文化財(昭43.2.15指定)。 ○棧瓦葺方形造屋根を有する3間×2間(3.37m四方)の堂宇。 ○元来、萱葺で前面にひさしがあったが、現在はとりはらわれている。 ※寺には近年まで萱葺入母屋造屋根の5間×4間の仏堂があったが、昭和54年冬の雪害により倒壊し、現在その部材のみが保存されている。	57.6.23
延寿院	天台宗	仙台市宮町五丁目6-18	客殿  地藏堂	文久元年 (1861)  慶応2 (1867)	○棧瓦葺入母屋造屋根を有する3間×2間(4.54×3.58m)の堂宇に一間の向拝が付く。 ○内部天井は格天井となっており、その天井板の一枚一枚に花草が描かれている。 ○棧瓦葺切妻造屋根を有する2間×3間(2.33×1.90m)の妻入の小堂。 ○前面屋根妻部分が2尺5寸程出しており、そのまま向拝となっている。 ※寺は、仙岳院の傍院の一つとして万治3年(1660)に開山したもので、文政元年(1818)の火災で焼失後再建されたものである。 なお、客殿につづく内殿は近年建替えられている。	57.6.23
大願寺	浄土宗	仙台市新坂町7-1	山門	宝永6 (1709)	○本瓦葺一間一戸(2.75×1.30m)の向唐門で、観音開きの棧唐戸が付いている。 ○門は元々総体黒漆塗であったと思われるが、現在は下地漆がむき出しになっている。 ○元来、万寿院(四代藩主伊達綱村夫人稲藤仙子)霊屋門として建立されたもので、明治初年に同寺へ移築された。 ※寺は延享3年(1746)及び、明治5年の火災で堂宇は尽く焼失し、現在の堂宇はその後のものである。	57.6.24
瑞鳳寺	臨済宗 妙心寺派	仙台市霊屋下23-5	門	江戸中期	○棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(4.36×1.15m)の薬医門。 ○元来は武家屋敷の門であったものを昭和37年に移築。 ○寺伝では、梶原品(高尾太夫)屋敷門であったといわれ、通称高尾門と称される。 ※寺は安政5年(1859)及び明治29年の火災で堂宇は尽く焼失し、現在の堂宇は大正年間～昭和初期にかけて建立されたものである。	57.6.28
誓渡寺	臨済宗	仙台市中野字阿弥陀堂37	山門	江戸	○萱葺切妻造屋根を有する一間一戸	57.6.29

寺社名	宗派	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
	妙心寺派				(2.42×1.87m)の薬医門で観音開きの扉が付く。 ※寺伝では、瑞巖寺の門を移築したとされる。	
冷源寺	浄土真宗 大谷派	仙台市成田町125	本堂  山門	慶安2 (1649)  天保8 (1837)	○元来、萱葺寄棟造屋根を有する6間×5間(11.50×10.50m)の仏堂で二間の向拝が付く。 ○昭和25年の改修により屋根は棧瓦葺入母屋造となっている。 ○棧瓦葺切妻造屋根を有する三間一戸(3.93×1.26m)の薬医門で両脇に袖扉が付く。 ※昭和25年の本堂改修の際棟札その他が処分されたため、実際は何時の建立かはたしかめるすべはないが、寺の記録では藩政時代から今日に至るまで火災にあった記録もないし、改築した記録もないことから、一応同寺の開山した慶安2年の建立とする(寺伝)。	57.6.30
宝善寺	浄土宗	仙台市坪沼字北ノ中47	本堂	江戸後期	○元来、萱葺入母屋造屋根を有する4間×3間(7.66×5.74m)の堂宇に二間の向拝と前面に6尺の浜縁が付く。 ○屋根は現在トタン葺に替えられている。 ※寺は宝暦3年(1753)に火災焼失しているので現本堂はそれ以降のものである。	57.7.2
徳照寺	浄土真宗 大谷派	仙台市日辺字宅地5	山門	天保7 (1836)	○棧瓦葺切妻造屋根を有する一間一戸(3.05×2.45m)の四脚門で、観音開きの扉が付く。	57.7.6
専能寺	浄土真宗 本願寺派	仙台市蒲生字鍋沼16	本堂	安政2 (1855)	○元々萱葺入母屋造屋根を有する7間×7間(12.76×12.38m)の仏堂で、二間の向拝と前面に4尺の浜縁が付く。 ※寺は江戸後期(安政年間以前)に火災にあい堂宇は焼失している。	57.7.7

表2. 第一次現地調査一覧表(神社)

神社名	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
愛宕神社	仙台市向山四丁目17-1	社殿  神門	江戸初期  文化元年 (1804)	○棧瓦葺切妻造屋根を有する5間×3間(10.6×5.75m)の拝殿と棧瓦葺流造二間四方の本殿を幣殿で連いた形をとる。 ○元来拝殿は萱葺入母屋造、本殿も萱葺もしくは柿葺であったと思われる。 ○建立年次については、慶長8年(1603)、慶安3年(1650)、元禄7年(1694)の三枚の棟札があり、決定しかねる。(資料I) ○切妻造屋根を有する三間一戸(7.95×3.70m)の八脚門。 ○左右に天狗像が安置される。 ○元々は萱葺もしくは柿葺であったと思われるが、現在は銅板平葺となっている。	57.6.9
熊野神社	仙台市通町一丁目3-16	社殿	享保7 (1722)	○棧瓦葺入母屋造屋根を有する3間×2間の拝殿と棧瓦葺流造屋根を有する一間社。	57.6.10
東照宮	仙台市東照宮一丁目6-1	本唐殿門	承応3 (1654) 承応3 (1654)	○国指定重要文化財(昭和28.3.31指定) ○国指定重要文化財(昭和28.3.31指定)	57.6.20

神社名	所在地	建造物	建立年次	構造・形式・解説・由来その他	調査日
		透塀 隨身門 手水舎	承応3 (1654) 承応3 (1654) 承応3 (1654)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○国指定重要文化財(昭和28.3.31指定)</li> <li>○国指定重要文化財(昭和55.1.29)</li> <li>○宮城県指定有形文化財(昭和39.9.4指定)</li> <li>○銅瓦葺入母屋造屋根に四本の丸柱(1間×1間:3.28×2.83m)の簡易な造りの建物である。</li> <li>○元は八角柱の四本柱だったものを昭和30年に丸柱になおしている。</li> <li>○拝殿は昭和10年に放火により焼失し、現在の建築は昭和30年に再建されたものである。</li> </ul>	
白山神社	仙台市木ノ下三丁目9-1	本殿	寛永17 (1640)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○宮城県指定有形文化財(昭和30.3.25指定)</li> <li>○柿葺流造屋根を有する一間社(2.37×2.12m)で、三方に縁、前面に向拝と浜床が付く。</li> <li>○昭和42年末に修理が為されている。</li> <li>※同社は、陸奥国分寺創建期(8C後半)に地主の守護神として祀られたとされ、古来より社殿の位置はしばしば移動したらしく、近年まで旧国分寺七重塔跡の礎石上に7つ建てられていたが、現在は江戸初期の位置に近い所に移築されている。</li> </ul>	57.6.22
松屋神社	仙台市宮町四丁目16-7	境内社 (火伏稲荷神社)	江戸末期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○柿葺入母屋造屋根を有する一間社(0.91×0.84m)で、前面に千鳥破風・唐破風を有する一間の二重向拝が付く。</li> <li>○現在は鞘堂がある。</li> </ul>	57.6.23
羽黒神社	仙台市北山二丁目8-15	境内社 (月山・湯殿山合祀)	江戸後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺入母屋造屋根を有する3間×2間(5.45×3.63m)の社殿に一間の向拝と後部に2間×1間(1.83×1.05m)の祭壇を造る。三方に浜縁が付く。</li> </ul>	57.6.24
生出森八幡神社	仙台市茂庭字中ノ瀬西31	社殿 (里宮)	江戸後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○元来、柿葺入母屋造屋根を有する3間×2間(6.50×4.03m)の社殿に一間の向拝と1間×1間(2.44×0.9m)の祭壇が付く。</li> <li>○屋根は現在銅板平葺になっている。</li> </ul>	57.6.24
榴岡天満宮	仙台市榴岡23	唐門	江戸中期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○銅板平葺の向唐門で、総体丹塗で、両脇に玉垣が付く</li> <li>※同社は元来、現東照宮のある玉手ヶ崎にあったが、東照宮造営の際同地へ遷宮される。なお、社殿は、寛政年間(1789~1801)ほかに火災焼失しており、現社殿は昭和3年頃落成したものである。</li> </ul>	57.6.28
八幡神社	仙台市飯田字土手畑51	社殿	江戸後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○萱葺入母屋造屋根を有する3間×2間(6.18×3.67m)の拝殿とトタン葺流造屋根を有する一間社(1.67×1.37m)の本殿を1間×3間(1.80×3.76m)の幣殿で連結している。</li> <li>○本殿は元来柿葺であったと思われる。</li> </ul>	57.7.1
八幡神社 (坪沼)	仙台市坪沼字館前東70	社殿	文化年間? (1804~'18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺入母屋造屋根の3間×3間(5.61×4.55m)の拝殿と棧瓦葺流造屋根の1間×4間(1.98×3.51m)の幣殿で連結している。</li> <li>○元来は、拝殿は萱葺、本殿は柿葺であり、昭和20年代後半に瓦葺に替えられた。</li> </ul>	57.7.2
五柱神社	仙台市藤塚字屋敷51	社殿	江戸後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○棧瓦葺入母屋造屋根の3間×2間(6.32×3.89m)の建物の東奥に奥間(神事の折の控所)が付く拝殿とトタン葺流造屋根の一間社(2.26×1.23m)の本殿を1間×8間の幣殿で連続している。</li> <li>○元来は拝殿は萱葺、本殿は柿葺であったと思われる。</li> </ul>	57.7.3

ところで、この一次調査の結果を参考に第二次現地調査を実施することになるのであるが、仙台市分については表3に示したとおり14ヶ所18件がその対称となった(表3)。

表3 第二次現地調査一覧表

調査箇所	調査物件	調査員	調査日
善 応 寺	開 山 堂	田中正三技師	昭57. 8. 26
正 楽 寺	本 堂 山 門	阿部和彦助手・田中正三技師 渡辺洋一	9. 8
成 覚 寺	山 門	〃	〃
仙 台 東 照 宮	手 水 舎	〃	〃
大 願 寺	山 門	〃	〃
白 山 神 社	本 殿	飯淵康一助手	〃
陸 奥 国 分 寺	仁 王 門 鐘 楼 准低観音堂	〃	〃
榴 岡 天 満 宮	唐 門	〃	〃
大 年 寺	惣 門	〃	〃
五 柱 神 社	本 殿・拝 殿	阿部和彦助手・田中正三技師	9. 12
落 合 観 音 堂 (光西寺)	観 音 堂	飯淵康一助手・渡辺洋一	〃
大 満 寺	虚 空 蔵 堂	佐藤 巧教授・阿部和彦助手 飯淵康一助手・田中正三技師 渡辺洋一	〃
愛 岩 神 社	本 殿・拝 殿	〃	〃
大 梅 寺	庫 裡	佐藤 巧教授・阿部和彦助手 飯淵康一助手・田中正三技師 渡辺洋一・山口 宏	9. 12

なお、二次調査の結果については宮城県教育委員会より報告がなされると思われるので、ここでは詳細な報告は省略することにする。

(5)

## ま と め

今回の調査の結果、在仙の社寺建築では、

1. 在仙の社寺数が現在数で243ヶ所と県内他市町村より格別に多いこと。
2. 中世以前の建造物が皆無であること。  
(6)
3. 在仙の社寺、特に寺院では単立は少なく、大半が数ヶ寺から数十ヶ寺とまとまって寺町を形成し、その位置が、当時の町の周辺部に置かれていること。  
(7)
4. 現存の社寺の総数が243ヶ所と多いわりには今回調査対象となった近世に建立された建築数が65件と少ないこと。  
(8)
5. 65件の対象物件の建立年代が一部を除きその大半が江戸時代中期以降の建造物であること。
6. 対象物件のほとんどが後年に手が増えられており、その中には当初の姿をとどめているも

のが少ないこと。

というような特徴を見い出すことが出来るが、それには次のような理由が考えられる。

仙台市は、その原形が近世初頭に仙台藩祖伊達政宗により仙台藩の城下町（府城）として形成されたものであり、その後今日に至るまで周辺の地域を併合しながら発展して来た都市である。従って城下町<sup>(9)</sup>という性格上、社寺の数も多くなり、藩政時代の状況を見ても、府城で神社<sup>(10)</sup>78、神事場6、仏堂60、寺院（傍院塔頭共）253の計397、しかもこれに後年仙台市に併合された新市域分の郡部を含めると神社165、神事場6、仏堂108、寺院（傍院塔頭共）346の計679という膨大な数にのぼり、明治時代以降寺社の統廃合が進んだとはいえども今日でもこれだけの数の社寺が現存することになる。また、寺町が藩政時代の府城の周辺部に位置するのは都市計画上、戦略的な意味があることがわかる。<sup>(12)</sup>

しかしながら、これらの社寺の大半は、仙台開府の折岩出山等から伊達家と共に移って来たもので、元来仙台の地にあった社寺もそのほとんどが府城の都市計画により移動を余儀なくされた。このことは、仙台市内に中世以前の建築が皆無であることの一因といえよう。<sup>(13)</sup>

ところで、仙台市内では、近世初頭の建築というと国宝大崎八幡神社、国指定重要文化財陸奥国分寺薬師堂、同仙台東照宮等ほんの数えるほどしかないが、これは仙台市が表4で示したとおり火災が多く、しかも寺町の置かれている寺小路（元寺小路）・八塚（新寺小路）・連坊小路・荒町等のほとんどが風下にあたり、大火がおこると必ずといってよいほど寺町までその被害がおよぶことが最大の原因といえよう。特に藩政時代では宝永4年（1707）、翌5年（1708）、享保12年（1727）、明和元年（1764）の大火による被害が大きく、北山・新坂地区を除くほとんどの社寺が一度は焼失しており、北山地区も明治9年の大火でそのほとんどが焼失しているし、その後戦災による焼失もかなりある。従って在仙の近世社寺建築総数が社寺総数のわりに少なく、しかも郡部を除き江戸時代中期以降の建築が多いという結果が出ることになる。<sup>(15)</sup>

表4 社寺火災年表

年 月 日	摘 要
寛永元年（1624）正月	新坂通称念寺焼失
寛永元年（1624）3月22日	北山光明寺焼失
寛永3年（1626）4月15日	北山（廢）称安寺焼失
寛永13年（1636）10月	荒町仏眼寺焼失
寛永19年（1642）	岩切東光寺焼失
正保4年（1641）4月12日	川内より出火し、南材木町・原町・定禅寺通等一円を焼失（寺小路・八塚・荒町等城下の寺町が焼失）
正保年間（1644～'48）	六郷邑今泉祐善寺焼失
慶安2年（1649）春	八塚（現新寺小路）孝勝寺焼失
承応元年（1652）正月17日	定禅寺通より出火し、本材木町一円を焼失（寺小路の寺院が焼失）

年 月 日	摘 要
承応元年 (1652) 正月18日	片平町より出火し、上染師町より南鍛冶町まで焼失 (荒町・南鍛冶町の寺院が焼失)
寛文年間 (1661~'73)	北山羽黒神社・(廃) 寂光寺焼失 (寛文10年; 1670以前)
元禄7年 (1694) 3月10日	新坂通 (廃) 専光寺焼失
元禄11年 (1698)	岩切青麻神社焼失
宝永3年 (1706) 4月15日	北山 (廃) 安楽寺焼失
宝永4年 (1907) 2月13日	荒町より出火、東七番丁・東八番丁以南五十ヶ町焼失 (昌伝庵・円福寺・保春院ほか、八塚・荒町・南鍛冶町等にある寺院の多数が焼失)
宝永4年 (1707) 2月20日	支倉通より出火、荒町・原町・北四番丁一円を焼失 (寺小路・八塚・荒町等の神社・寺院が焼失)
宝永4年 (1707) 3月10日	大聖寺より出火、東三番丁附近まで焼失 (寺小路の寺院を焼失)
宝永5年 (1708) 正月24日	石切町より出火、木ノ下小泉・原町・北四番丁等城下一円 $\frac{2}{3}$ 程度を焼失 (寺小路・八塚・荒町・南鍛冶町等の神社・寺院の大半が焼失)
宝永年間 (1704~'11)	新坂通永昌寺焼失
宝永年間 (1704~'11)	六郷邑今泉祐善寺焼失
正徳4年 (1714)	八塚東秀院焼失
正徳年間 (1711~'16)	荒町常念寺焼失
享保2年 (1717) 3月	北七番丁林宅寺焼失
享保11年 (1726)	寺小路満願寺焼失
享保12年 (1727) 3月16日	北二番丁より出火、二日町・国分町・大町・新伝馬町より八塚・南小泉に至る城下東南部大半が焼失 (寺小路・八塚・荒町・南鍛冶町等の東南部にある神社・寺院の大半が焼失)
元文5年 (1750) 2月15日	新坂通称念寺より出火、新坂通・北七番丁を焼失 (新坂通周辺の寺院が焼失)
延享3年 (1746) 2月22日	新坂通大願寺より出火、北山・二日町・堤通まで焼失
寛延2年 (1749) 2月15日	新坂道莊嚴寺焼失
寛延3年 (1750)	連坊小路松音寺焼失
宝暦3年 (1753) 10月	坪沼宝善寺焼失
宝暦年間 (1751~'64)	荒浜浄土寺焼失
明和元年 (1764) 10月27日	北目町より出火、南鍛冶町・八塚・南小泉まで焼失
明和2年 (1765)	宮町仙岳院焼失
安永5年 (1776) 4月18日	川内より出火、大町・国分町・新伝馬町・名掛丁まで焼失
天明元年 (1781) 10月	堤町日浄寺焼失
天明2年 (1782) 3月	東九番丁 (廃) 法円寺焼失
天明4年 (1784) 3月5日	三条町大法寺焼失
天明年間 (1881~'89)	新坂通称念寺焼失
天明年間 (1781~'89)	向山長徳寺焼失
寛政2年 (1790)	北山覚範寺焼失
寛政年間 (1789~1801)	榴岡天満宮焼失
文化元年 (1804) 正月9日	北八番丁満勝寺焼失
文化4年 (1807) 3月5日	小田原弓ノ町八幡神社焼失
文化9年 (1812)	新坂通正円寺焼失
文化15年 (1818) 5月	宮町延寿院焼失
文政5年 (1822)	八軒小路浄沢寺焼失 (2月26日の小泉村大火の折の焼失か?)
文政8年 (1825) 4月	滝前丁来迎寺焼失
文政10年 (1827) 正月25日	肴町・国分町・大町・南町焼失 (町方の神社が焼失)
天保初年 (1830頃)	燕沢大蓮寺焼失
天保5年 (1834)	宮町大火 (福沢神社等焼失)
天保8年 (1837) 4月19日	越路宗禪寺焼失

年 月 日	摘 要
天保9年(1838)	新坂通昌繁寺焼失
弘化元年(1844) 4月16日	東九番丁報恩寺・栄明寺等焼失
弘化4年(1847)	荒町仏眼寺焼失
嘉永2年(1849)	八塚光寿院焼失
嘉永3年(1850) 8月	北七番丁林宅寺焼失
嘉永6年(1853) 正月8日	八塚孝勝寺・大徳寺・東秀院等焼失
嘉永6年(1853)	中野雷神社焼失
安政5年(1858) 正月	新坂通昌繁寺焼失
安政5年(1858) 8月15日	霊屋下瑞鳳寺焼失
安政年間(1854~60)	八塚(廃)西福院焼失
文久3年(1863) 3月5日	今泉祐善寺焼失
慶応2年(1866) 3月18日	原町陽雲寺焼失
慶応3年(1867)	寺小路満願寺焼失
明治初年	長町福聚院焼失
明治元年(1868) 正月7日	十二軒丁弥勒院焼失
明治2年(1869) 正月27日	北二番丁より出火 宮町一円焼失
明治3年(1870) 4月8日	北山資福寺焼失
明治3年(1870) 9月23日	連坊小路松音寺焼失
明治4年(1871)	寺小路大聖寺焼失
明治5年(1872) 2月	新坂通大願寺・(廃)知経院・(廃)入玄院ほか焼失
明治6年(1873)	東十番丁徳泉寺焼失
明治7年(1874)	東十番丁願行寺焼失
明治9年(1876) 3月5日	北山一帯大火(北山の寺院の大半が焼失)
明治9年(1876) 4月18日	北山(廃)知松院焼失
明治10年(1877)	河原町大火(桃源院焼失)
明治10年(1877) 3月7日	富田成就院焼失
明治13年(1880) 12月28日	北山光明寺焼失
明治18年(1885) 2月22日	国見寿徳寺焼失
明治29年(1896) 4月1日	瑞鳳寺焼失
明治31年(1898) 3月28日	北山(廃)知松院焼失
明治31年(1898) 3月31日	二十人町矢崎神社焼失
明治31年(1898) 4月18日	東九番丁久近寺焼失
明治33年(1900) 12月	北山覚範寺焼失
明治35年(1905) 2月16日	連坊小路保寿寺焼失
明治35年(1902) 5月20日	荒町峻林寺焼失
明治37年(1904) 7月15日	荒町満福寺毘沙門堂焼失
大正元年(1912) 10月13日	宮町福沢神社焼失
大正2年(1913) 4月12日	西多賀多賀神社焼失
大正13年(1924) 5月2日	北二番丁光禪寺地藏堂、同じく南鍛冶町泰心院焼失
昭和10年(1935) 8月6日	仙台東照宮拝殿焼失
昭和14年(1939) 3月1日	八幡町龍宝寺宝法蔵焼失
昭和20年(1945) 7月10日	戦災(寺小路ほか市内中心部の大半の神社・寺院が焼失)

※仙台市史巻7、仙台消防誌、宮城県寺院大総覧より

また、現存する建築の大半に後補がなされ、その中には当初の姿をとどめない程度にまで行なわれているものが少なくない。このことは、建築そのものか建立後100～200年を経れば維持管理のよいものであっても破損は出てくるし、建造物であれば社寺建築であってもその時その時にその建築を使う人間が使いやすいうように改良されていくということを考慮しなければならない。しかし、このほかにもこれらの建築を維持していく上で、当初の姿のままでは維持費がかさむことから維持費の軽減をはかったり、補修の折、当初の姿にするだけの技量を有する者がいなくなったりして変っていくものもある。このよい例が、当初萱葺・柿葺・本瓦葺の屋根であった堂宇が銅板葺、トタン葺、棧瓦葺等に替えられたり、板戸・蔀戸・障子等がサッシ戸に替えられたりすることである。

さて、近年、仙台市にかぎらず、鉄筋コンクリート造の社寺建築が増加し、その分だけ近世建築を含む木造社寺建築が減少して来ている。このことは、建立後100～200年を経た社寺建築が全体的に補修を必要とする時期に来ており、維持管理者によっては旧来の建造物を補修するより、全面的に建て替えた方が建設経費の軽減及び、しかも今後の維持費の軽減を計ることが出来ると考えることもあるが、それ以上に建築基準法等の制約により木造建築の補修・建て替えがむずかしくなっていることもその大きな原因となっている。今後はこの傾向がより顕著になっていくものと考えられ、仙台市においても今回の調査対象となった65件全てがそのままの形で残るということは考えられず、今回の調査結果は今後これらの社寺建築を考える上の重要な資料となることであろう。

## 〔註〕

1. 昭和53・54年度の分布調査では社寺建築にかぎらず民家・洋風建築を含めた古建築の調査を行ない文化財基本台帳の整備を行ない、合せて保存管理状況の調査を行なった。  
調査員：渡辺洋一・山口宏、調査補助員：岡崎修子・橋浦由美
2. 社寺の所在地・所有者・由来及び該当物件の建立年代・資料・構造・形式の調査、写真撮影、見取図の作成を行なった。
3. 内訳は天台宗8・天台寺門宗1・高野山真言宗1・真言宗御室派1・真言宗智山派9・浄土宗23・浄土真宗本願寺派9・真宗大谷派12・時宗2・臨済宗妙心寺派8・臨済宗東福寺派3・曹洞宗51・如来教2・黄檗宗3・日蓮宗12・日蓮正宗3・本門仏立宗3・日本山妙法寺大僧伽1・単立10である。
4. 今回の調査では国宝大崎八幡神社殿（明27.11.22指定）及び国指定重要文化財大崎八幡神社長床（昭41.6.1指定）・仙台東照宮本殿・唐門・透塼（昭28.3.31指定）・同隨身門（昭55.1.29指定）・陸奥国分寺薬師堂（昭36.4.11指定）の国指定物件は対象からはずされた。
5. 宮城県文化財調査報告書第 集「 」に詳しい。
6. 仙台最古の建築は大崎八幡神社・陸奥国分寺薬師堂の慶長12年（1607）建立である。
7. 神社でも大崎八幡神社・亀岡八幡神社・愛宕神社・羽黒神社・仙台東照宮など府城の周辺部の丘陵地域に鎮座している。

8. 国指定物件6件は除く。
9. 慶長5年(1600)それまでの城下岩出山より移ったもので、城下町(府城)の地域は明和5年(1768)刊の『封内風土記』によると「宮城郡国分荘荒牧、小田原、小泉、南目、名取郡根岸五邑相接。而地乃荒牧邑内地、東限少林・木下・原町倉廩、西限葛岡山・文殊堂、南長町橋・茂崎、北限神明・北山・杉山」とあり、明治22年の市制施行当初の仙台市の地域である。
10. 昭和3年に長町(旧茂崎村)・原ノ町・七郷村南小泉の一部が、昭和6年に七北田村荒巻・北根が、昭和7年に西多賀村が、昭和16年に七郷村・岩切村・高砂村・六郷村・中田村が、昭和31年に生出村が合併し、現在の仙台市の市域が出来上った。
11. 『封内風土記』による。
12. 明治時代以降、神仏分離策、修験道の廃止、宗教機関への保護の廃止、度重なる戦争による社寺管理者の根絶、戦後の宗教法人法の発布による宗教界の統制等による。
13. 中世から仙台市域地に存在した寺院としては、旧最上街道沿(仙台城二の丸あたり)の龍川院(現龍泉院)、越路の宗禪寺等があるが、このうち府城で元の位置にあるのは宗禪寺だけで、その他は仙台開府の際の都市計画により移動している。
14. 寛永14年、城下の拡張によりそれまで寺小路にあった寺院の一部を八塚に移した。それ以降、元来の元小路を元寺小路(藩政時代は本寺小路とも記した)、八塚を新寺小路と呼ぶようになる。しかし、その折移された寺院がどの寺院であるかは不明である。『仙台鹿の子』(刊行は元禄8年頃か?)、小倉博著「元寺小路とその附近」(『仙台郷土研究』巻11-1)
15. 特に元寺小路の寺院は壊滅的打撃を受け、移転したり廃寺になったりして現存するのは満願寺(天台宗)一寺である。
16. 専能寺本堂、冷源寺本堂等がよい例である。
17. 正楽寺本堂、大梅寺庫裡、清浄光院本堂等がよい例である。
18. 建築基準法では、現在補修・建て替えを含む建造物の建築にあたっては耐火構造を基本としており、社寺建築についても文化財保護法の規定により指定もしくは仮指定の文化財になっているもの以外はこの適用を受け、建築審査会の同意が得られないかぎり木造による補修・建て替えは認められないことになっている。

## 〈参 考 文 献〉

- 『宮城県寺院大総覧』  
『宮城県神社名鑑』  
『仙台消防誌』  
「仙台の社寺と教会」 山本 晃 『仙台市史』巻7  
「元寺小路とその附近」 小倉 博 『仙台郷土研究』巻11-1  
『封内風土記』  
『仙台鹿の子』  
『実測図仙臺及び近郊の古建築』 北匠会

(裏) 種子 奉迂宮愛宕大権現湯立 旦那午傳衆息別而寺内安全如意滿足之所

元祿七年戌年 御奉行衆 中村左衛門殿 津田民部殿 遠山常刀殿 永沼野殿 御奉行衆 佐藤内膳殿 武市善兵衛殿 午團帳箱入奉納宮殿之 管因法行日 敬  
三月廿四日 大町持九郎殿 本名九左衛門殿 本修理殿 御作事奉行衆 普請奉行 嵐田平助 大工頭梁 團三良 人足方 徳左衛門 筆者 凱徳寺 岩瀬海人殿 禮田善兵衛殿

資料II—落合觀音堂棟札

(表) 種子 奉立再興觀音堂一字 一切自皆善一切宿此賢 諸佛皆威徳 大檀主中納言藤原朝臣政宗 領域成吉祥

羅漢皆行滿以斯誠實言

奧州名取郡北方白丸 別当大善院 大江田正右衛門

(裏) 種子 南無堅牢地抽上 于時寛永肆丁卯年九月拾八日入佛道師阿闍利善隆 敬白

南無立帝龍 者欲 甲 御奉行 茂庭周防守 賀藤忠左衛門

資料III—(1) 大梅寺庫裡棟札

(表) 梁銘云 北 多門不可默緊要祈護特檀門兼師徳 東 持國崇英雄般若波羅蜜功重何敢空 南 福海増玄澤壽山長五岳子孫現優曇 西 封疆守山溪廣目明天海誓度群生迷

(裏) 白鹿堂舊基入寂滅道場 大檀門地久先師域天長 咄

大工 星長兵衛製

(裏) 元祿庚辰八月八日

塔主 大龜葉誌焉

資料III—(2) 大梅寺開山堂棟札

(裏) 元祿拾三庚辰年八月八日

塔司 大龜葉誌







写真1 庫 裡



写真2 開 山 堂



写真3 書院（旧御六御殿）

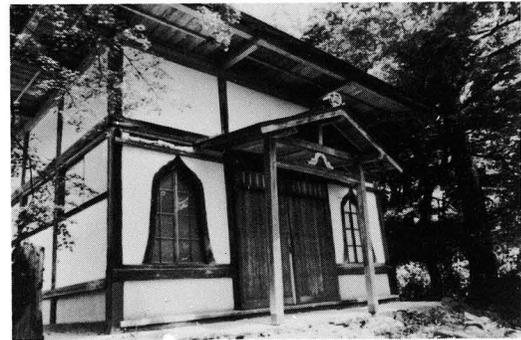
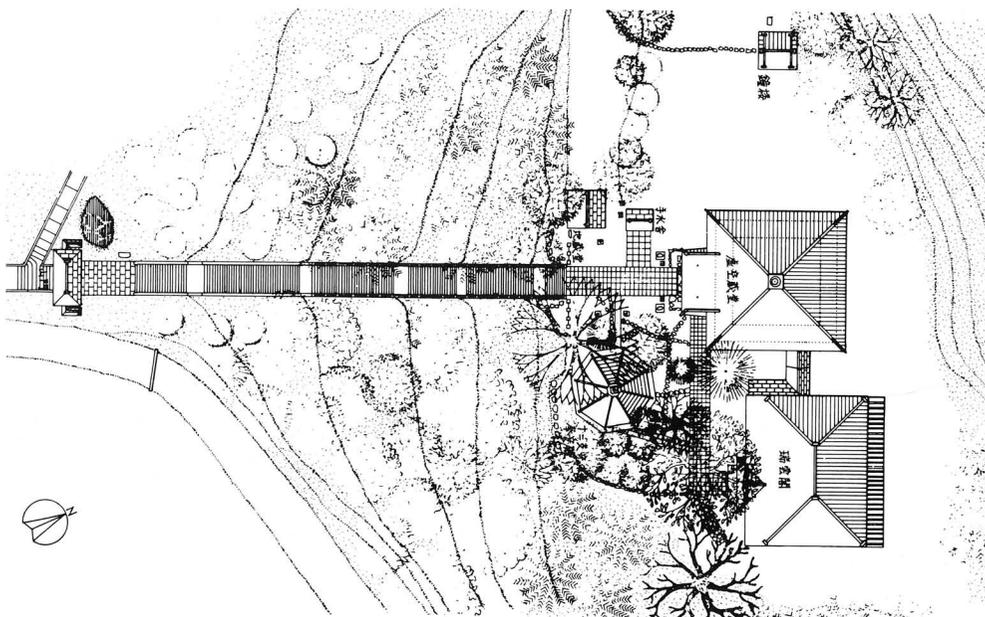
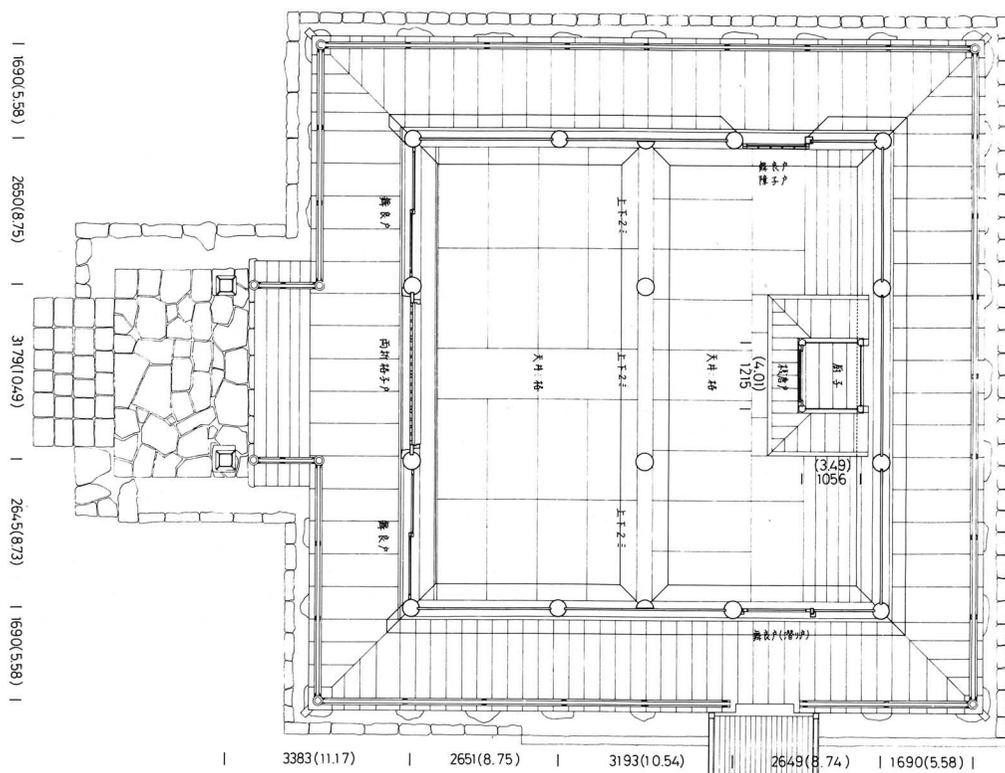


写真4 座 禅 堂

# 大満寺虚空蔵堂



配置図



平面図

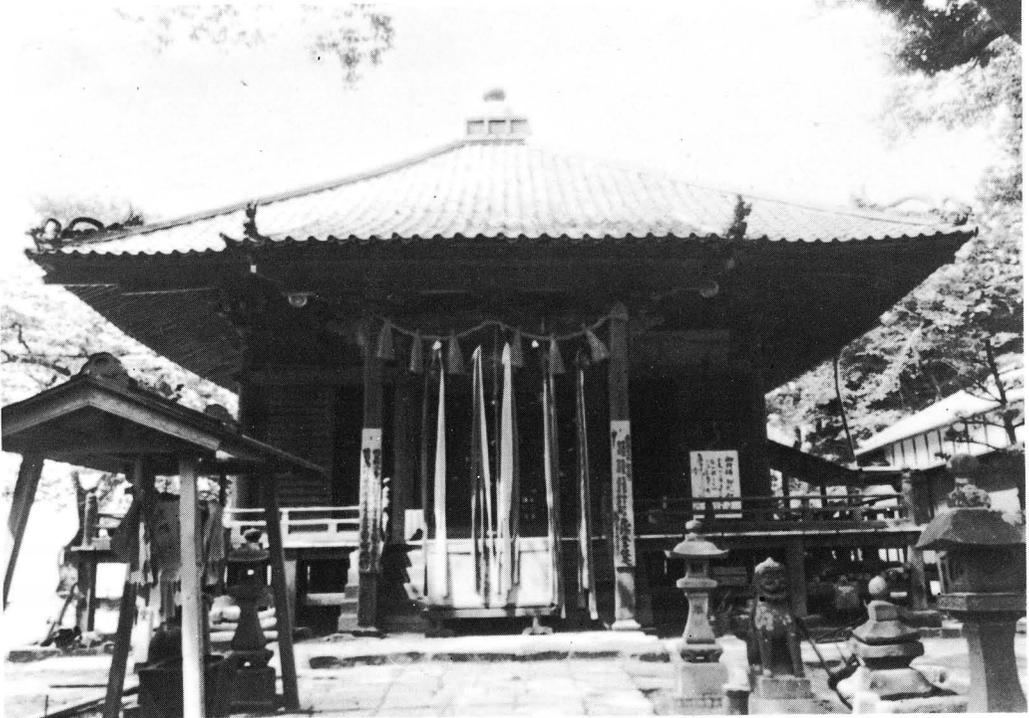


写真5 虚空藏堂正面

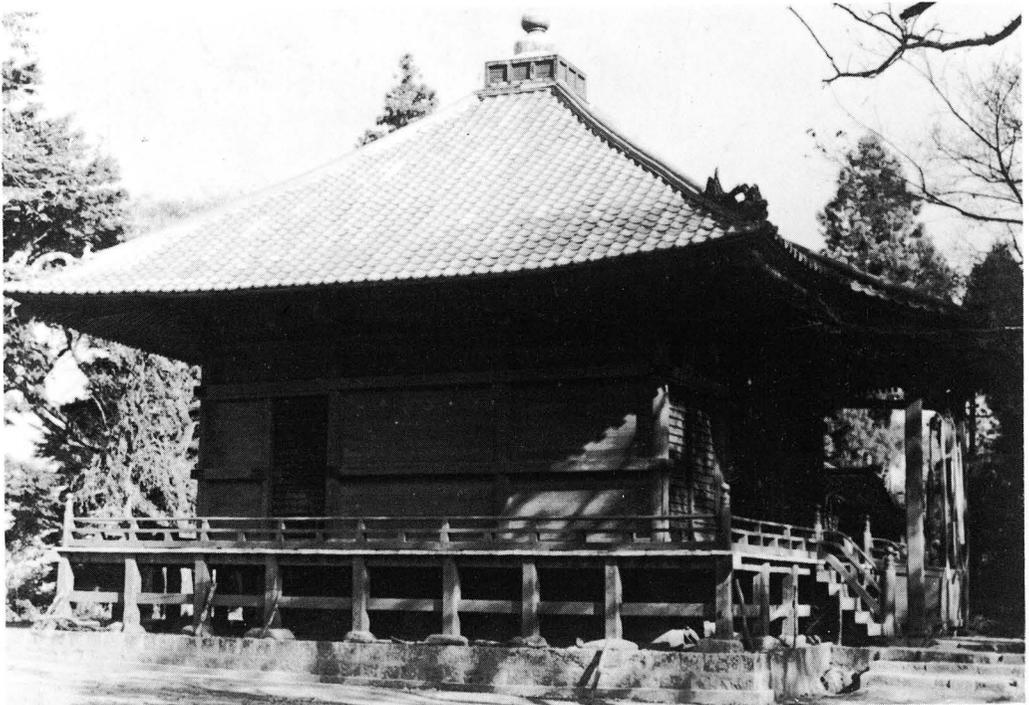
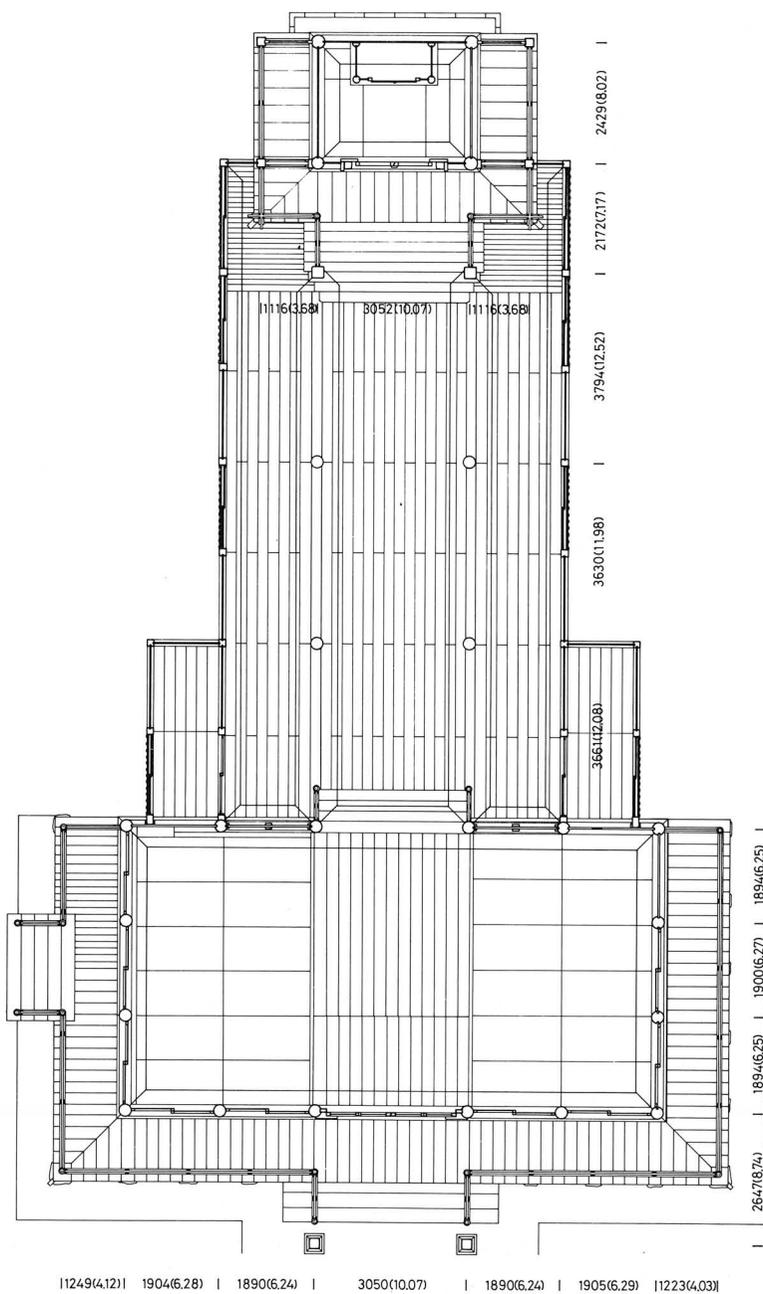
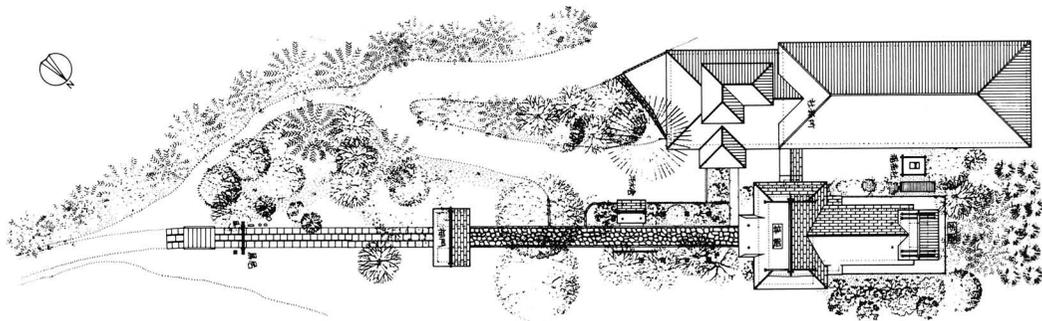


写真6 虚空藏堂側面

# 愛宕神社



平面図



配置図



写真7 本殿（側面）

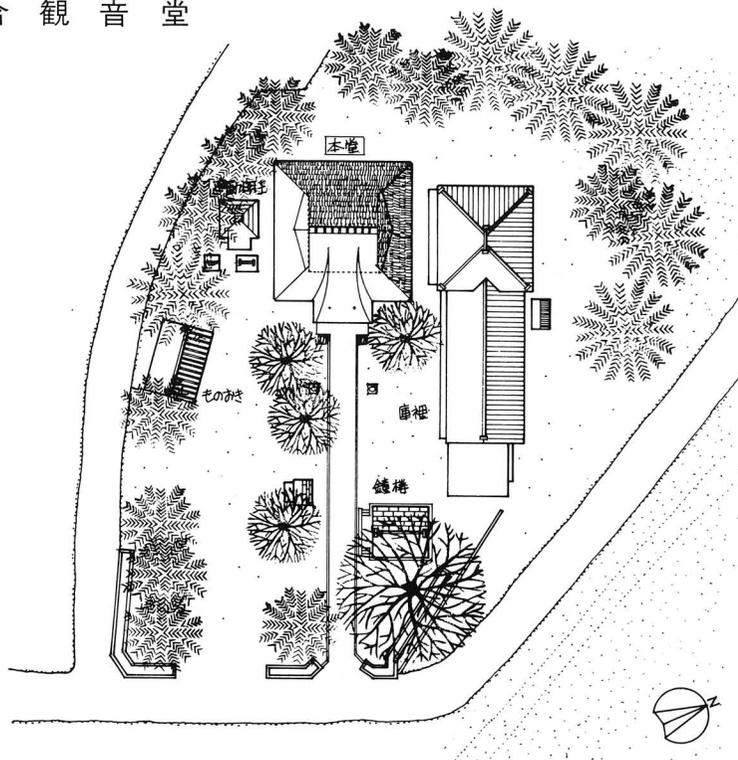


写真8 拝殿（正面）

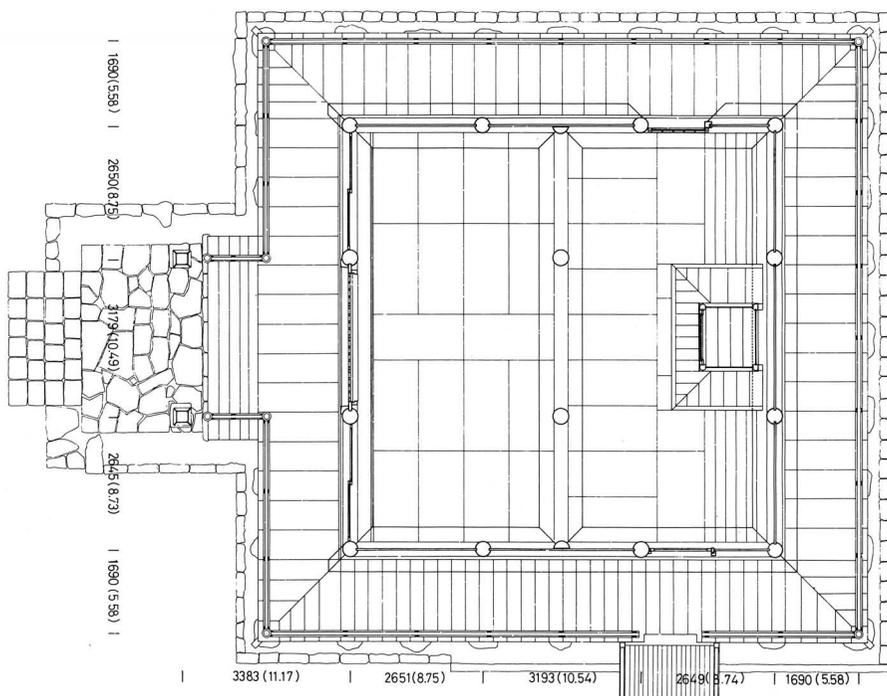


写真9 神門

# 落合 観音堂



配置図



平面図

写真10  
観音堂（正面）



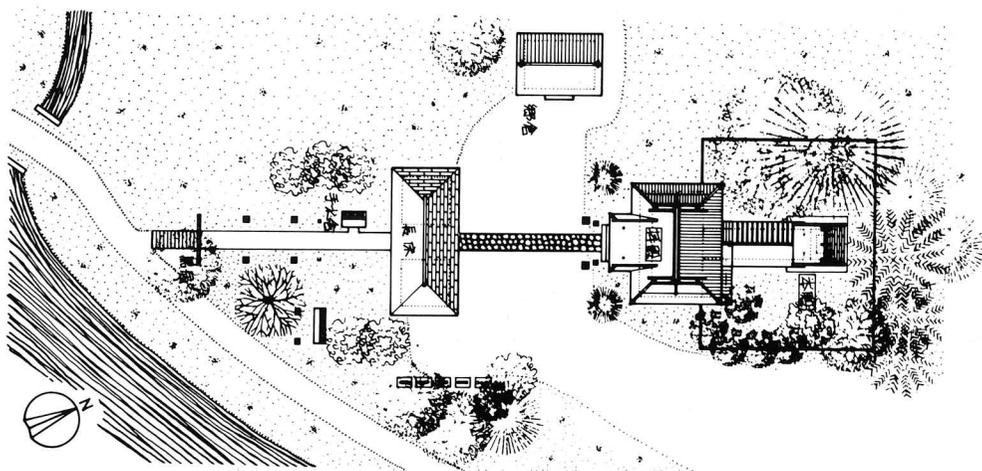
写真11  
観音堂（側面）



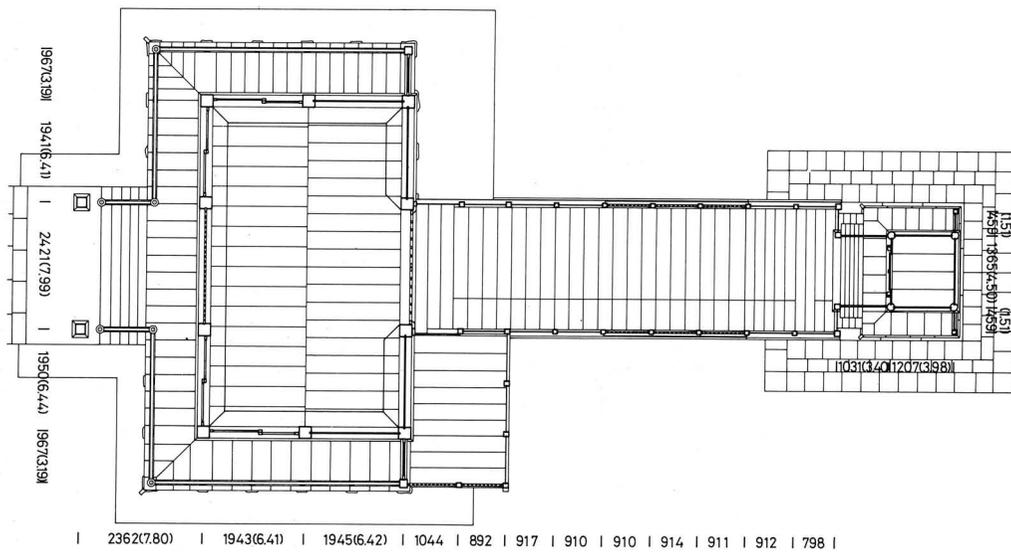
写真12  
観音堂（向拝部）



# 五柱神社



配置図



平面図

写真13  
拝殿(正面)



写真14  
拝殿(向拝部)



写真15  
本殿(側面)





写真16 松音寺本堂



写真17 同 山門(側面)



写真18 同 山門(正面)



写真19 同 山門(軒下)



写真20 正楽寺本堂



写真21 同 法宝蔵



写真22 同 山門(正面)



写真23 同 山門(裏面)



写真24 孝勝寺山門



写真25 同 釈迦堂

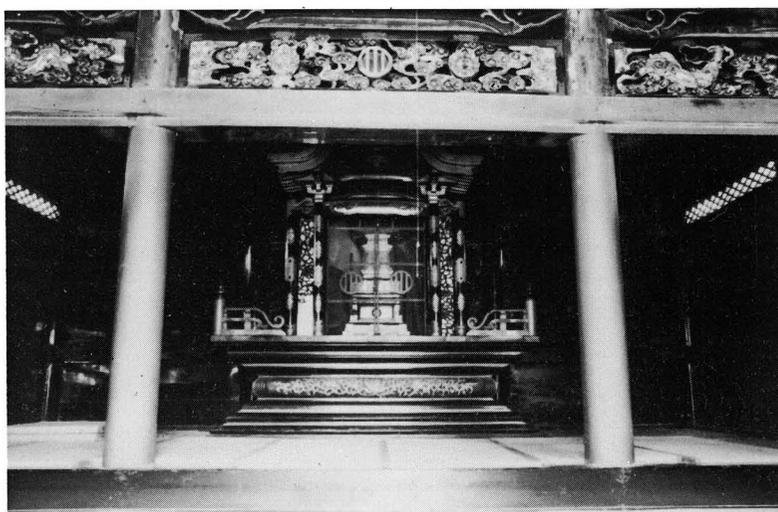


写真26 同 釈迦堂  
(内部)



写真27 陸奥国分寺  
山門



写真28 同 鐘楼



写真29  
同准胝観音堂



写真30 善導寺本堂



写真31 同 山門



写真32 冷源寺本堂



写真33 同 山門



写真34 東漸寺本堂



写真35 同 山門



写真36 称念寺本堂



写真37 同 山門



写真38 同 鐘楼



写真39 善敬寺本堂



写真40 同 山門



写真41 仏眼寺本堂



写真42 同 山門



写真43 昌纂寺山門



写真44 同 観音堂



写真46 龍泉院本堂



写真47 大法寺本堂



写真48 大林寺本堂



写真49 清浄光院本堂



写真50 仙岳院本堂



写真51 宝善寺本堂



写真52 専能寺本堂



写真53 善入院観音堂



写真54 延寿院客殿



写真55 善応寺開山堂



写真56 輪王寺山門



写真57 大年寺惣門



写真58  
満福寺唐門  
(毘沙門堂)



写真59 泰心院山門



写真60 同 軒下



写真61 莊巖寺山門



写真62 成覚寺山門(旧浄眼院廟門)



写真63 寿徳寺山門



写真64 大願寺山門(旧万寿院廟門)



写真65 徳照寺山門



写真66 誓渡寺山門



写真67 瑞鳳寺門(高尾門)



写真68  
白山神社(正面)



写真69 同 (側面)



写真70  
(飯田)八幡神社拜殿

写真71 同 本殿  
(側面)



写真72  
(坪沼)八幡神社拝殿



写真73 同 本殿  
(側面)





写真74 榴岡天満宮唐門



写真75 松尾神社境内社(火伏稲荷神社)



写真75' 羽黒神社境内社



写真76 生出森八幡神社社殿(里宮)



写真77 仙台東照宮 手水舎



写真78 熊野神社社殿

〈参 考〉



写真79 大崎八幡神社社殿



写真80 同 長床



写真81 陸奥国分寺薬師堂



写真82 仙台東照宮隨身門



写真83 本殿 唐門透塀



写真84 同 唐門



写真85 同 本殿(正面)



写真86 同 本殿(側面)

# 仙 台 市 郡 山 の 民 俗

# 仙 台 市 郡 山 の 民 俗

## は じ め に

本報告は仙台市の郡山地区で行った信仰に関する調査結果をまとめたものである。郡山地区は大きく郡山中区・北目・諏訪に分けられ、郡山中区は矢口、矢来、在家、籠ノ瀬に分かれる。

### (1) 調査期間

昭和56年 3 月 3 日～昭和56年 3 月11日

昭和57年 3 月 3 日～昭和57年 3 月12日

### (2) 調査組織

調査主体 仙台市教育委員会

調査員 山口宏(社会教育課主事)、成澤淳一、中富洋、斎藤豊(東北学院大学民俗学研究会)

調査協力 (話者) (敬称略)

(郡山二丁目) 佐々木功、佐々木より子、渡辺久治、渡辺シノ

(郡山三丁目) 赤井沢久治、赤井沢文枝、斎藤たより

(郡山四丁目) 沼田長、沼田マシエ

(郡山五丁目) 佐藤政治、佐藤ますよ、二階堂武夫

(郡山字北目) 安齋善蔵、安齋終子、安齋みどり、安齋芳子、菅野いせよ、菅野きえ子  
白石富美子、鈴木しめ、高橋庄八、沼田サチ

(郡山字籠ノ瀬) 赤井沢勝春、鈴木正利、鈴木とよの

(郡山字欠ノ上) 安齋誠

## 1. 郡山地区の概況

郡山地区は仙台市街の南部、国鉄東北本線長町駅の東側に位置し、地理的に、広瀬川が形成した標高10m～12mの自然堤防で、南につれて低くなり、標高6～8mの名取川氾濫原へと移行する北高南低の土地で、北から東にかけて広瀬川が流れ、南方約1.5kmには名取川が東流し、南東2kmのところで両河川は合流し、6km下流で太平洋に注いでいる。西方は市街地を介して4km程のところから標高100～120mの丘陵が続いている。南・北・東に河川、西に丘陵という三角地帯の東辺に位置するこの地区は天然の要衝ともいえ、古くから街道にも隣接している。ま

た、仙台平野の中央に位置し、水利に恵まれた耕土として開けていた。

歴史的には、昭和55年度からはじまった郡山遺跡の発掘調査により7世紀後半から8世紀初頭にかけて畿内・関東の諸国と何らかの関連のある大規模な官衙が造営されていたことが明らかになった。

また、郡山には中世に建てられた板碑も多く確認されている。さらに、『観蹟聞老志』によれば、「郡山には往昔北目城（喜多目）があり、栗野大膳の古館で、かつて伊達政宗がこの城に居て、慶長5年の秋、最上氏の援兵をここから発した」と記している。『封内風土記』には「郡山に諏訪神社があり、足軽の居住地であった云々」と記録してある。さらに仙台の北目町に祀ってある二十三夜堂と、その別当寺賢聖院とは古くは郡山邑北目にあったのを慶長年中に城下北目町に移したと伝えられている。

最近では仙台の近郊農業地帯として疎菜栽培が盛んで、ハウスによる園芸栽培も行われている。また、工場や住宅の建設も活発で、その様相も一変しようとしている。

## 2. 講

### (1) 観音講

講日は戦前まで旧暦の2月17日と10月17日だったが、現在は新暦で行われ、郡山中区の矢口・矢来・籠ノ瀬の24軒の主婦やおばあさんが参加している。宿は持回りで、くじ引きで順番を決め、12年に1回宿が回るようになっている。4、5軒でグループを作り、その中の人々が宿に当たった時にはお互いに手伝う。昔は各家々を回ったが現在は公会堂を利用することも多くなった。

講日のご馳走は精進料理で、寿司（稲荷寿司・のり巻）を食べる。昔は赤飯で、それ以前はアッコ餅だった。赤飯の時には米5合を各家から持ち寄り、昼夜2回子どもと一緒に膳を囲んだ。夜にはいろいろな人を寄せて楽しんだ。

講には御本尊と掛軸があり、宿に当たった家で大切に保管している。掛軸は中国に行ってきた人の持ち物だったが、寄贈してもらった。

### (2) 山の神講

北目地区では現在も春（2月）と秋（11月）の2回、土曜日に行われ、会費制である。宿は持回りだったが、現在は北目毘沙門堂前の公民館を使用している。

講には各家の主婦が参加し、講員は38名で、6班に分かれ当番制である。以前は嫁になっても10年ぐらいいは参加できなかった。当番になった班をテイカタといい、講当日、北目宅地の山神碑の前に幟を立て、昼食と夕食の準備をする。講に参加する人はまず手を洗い、山神碑をお参りする。次に公民館に行き、山の神の掛軸を拝み賽銭をあげる。これは積み立てておき、

代参する時に持って行く。講はお昼に始まり、まず、会食する。その後、部落総会等を行い、夕食をとり、午後10時までに終了する。

料理は精進料理で、さつま芋のあんかけを作ったり、赤飯を炊いた。最近では魚や肉料理も出され、どんと祭の時の酒をいただいて来て卵酒にして飲んだりする。

諸行事が終了すると小牛田町の山の神神社にお参りする。昔は毎年5、6人で行ったが、今は2年に一度全員でお参りする。

### (3) 古峯原講 (コバハラ講)

矢口・矢来・籠ノ瀬で行われている。古い記録が発見されて、昔、矢口・矢来では一緒に行われていたことがわかった。栃木県鹿沼市にある古峯神社に講員が代参し、火防と家内安全を祈願する。代参はくじ引きで順番を決め、矢口で4名、矢来で2名、籠ノ瀬で3名ずつ行く。講員で積み立てておき、その時の旅費とお賽銭に充てる。1月にお参りに行き、講員全員のお札をうけて来て配布する。この時の集りをゲコウという。その時には代参した者が御神酒として酒1升を土産に持って来て皆に振舞う。ご馳走は宿に当たっている家で作り、米は各家で持ち寄る。米の量も矢口では3合、矢来では2合と決っている。講は昔5回行っていたが、現在は3回しか行っていない。講会当日は古峯原神社という掛軸をかけて宴を開く。

### (4) 天王講

籠ノ瀬で行なわれておりゴテンノウサンまたスサノウ講という。講日は11月15日で、17戸の農家で講成され、参加者は戸主である。講の準備は当番(ヤドマイという)の家で行ない、人手不足の場合に近所から手伝いをもらう。なお、宿は持回りである。

講日は朝8時頃、ヤドマイの家に集合し餅を搗く。その後、天王の祠へ行き、搗きたての餅野菜(人参、大根など)・御神酒を供え、全員で参拝する。その際、諏訪神社の宮司が祓いをする。それから一旦解散し、夕方6時頃、再び宿に集合し会食する。料理はヤドマイが作る。

また、6月14日には胡瓜祭りが行なわれ、この日祠に胡瓜と御神酒を供え、諏訪神社の宮司が祓いをする。籠ノ瀬の農家には各々その年の初物である胡瓜を供える習慣もある。

### (5) うか様講

うか様と呼ばれる祠は諏訪神社の東、畑の中の椿の木の下に祀られている。講日は旧10月10日(現在は11月10日)の夜で、うか様に注連縄を張り、赤飯・御神酒・魚などを供える。諏訪神社の宮司が祓いをし、全員でお参りした後、ご馳走を食べる。宿は持回りである。講員は庄子家3名、佐藤家2名、菅原家、二階堂家、岡井家、荒川家、高橋家各1名の10名である。

## (6) 伊勢講

北目で行われており、高橋庄八氏が30年くらい前から始めたもので、30～50歳代の人が入っている。積立てをして、伊勢神宮にお参りする。

## (7) 諏訪献膳講

300年くらいの歴史があり、諏訪神社で行われる。300～400人で組織され、20人ほどの世話人がいる。五穀豊穰、商売繁昌を願って、5月の第2あるいは第3日曜日に開かれ、直会がある。

## (8) 念仏講

籠ノ瀬地区に30年前まで続いていた講である。講日は春と秋の2回で、ヤドマイの家の最も新しい仏の命日である。講の準備はヤドマイが行ない、宿は持回りである。

講は夕刻に始まり、各々の家から持ち寄った米と精進料理で会食し、食後念仏を唱えた。講員全員で輪を作り、輪の中に1人が入って鐘を鳴らした。念仏を唱えながら長い数珠を右へ回し、ボンボリ（数珠に付いたフサ）が自分の前に来た時、それを両手で握って額に寄せ拝んだ。それを全員が13回行った。この念仏をジュウサンブツとも呼んだ。

念仏講は北目でも行われたという。

## (9) 馬頭観音講

普通、馬頭講といわれ、籠ノ瀬地区では4・5年前まで続いていた。馬を飼っている農家は殆んど参加した。

講は正月、5月、9月の年3回開かれた。講の準備はヤドマイが行い、順番制だった。講員は男だけで、講日には夕方6時頃から会食が行なわれた。その時の米は各々が持ち寄った。

毎年2月17日、講員全員で村田町の松尾神社にお参りした。

## 3. 石 碑

### (1) 薬田如来

郡山二丁目14-19、渡辺久治氏宅地内にある2基の板碑(徳治3年・1308、嘉暦2年・1327)をこのように称している。

古くから、耳の病に効くという伝承があり、多くの人々がここを訪れ願をかけたという。まず2基の板碑を拝み、カワラケと呼ばれる素焼きの器を1個借りて帰り、これで耳を撫でると病が治ると言われている。耳病が癒えるとお礼参りに訪れ、その際カワラケを2個にして返した。薬田如来のお堂にはかつて紐に通したカワラケがたくさん下っていた。

毎年5月3日が祭日で、この日、薬田如来に白い幣束・ローソク・線香・花・御神酒・赤飯・野菜(韭・蓴・ほうれんそう)・果物(夏蜜柑・林檎・バナナ)を供え、秋保町湯元のお薬師さん(泉明寺)からよんだ別当に拝んでもらい、その後、直会となる。

## (2) 佐々木功氏宅地内板碑群

郡山二丁目10-5、佐々木功氏宅地内に8基の板碑がある。20年ぐらい前までは旧3月15日を祭日として親類や隣人10人程で祭りを行なった。この日は石碑の両側に幟を立て祭壇を作って供物を供え、祓いをした。現在は、5月5日に幟を立て、魚や御神酒を供える。また、お年取りには餅を供える。

## (3) 馬頭観音碑

機械化以前の農作業にとって馬の役割は重大で、農家では大切に馬を扱っていた。馬が病気や不慮の事故で死亡した時には屋敷内に葬り馬頭観音碑を建て供養した。

北目毘沙門堂脇には「仙台産馬商組合」建立のものがある。これは郡山にかつて競馬場があり、そこに建てられていたものをここに移したという。

郡山字欠ノ上1番地、安齋誠氏宅地内の碑(寛政8年・1796)には「東ハゆり阿げ、○ハせんだい」の銘がある。これは馬の供養と共に道標の役割も果していたと思われる。

## (4) 山神碑

郡山地区には3基の山神碑がある。山神は安産の神で、郡山字北目宅地43、安齋善蔵氏宅地前の碑には「兒子多」の銘が刻まれ、その性格をよく表わしている。

## (5) 供養碑

郡山字北目宅地43、安齋善蔵氏宅地前の石仏が彫られた碑(享保16年・1731)には、かつてこの場所で首まで埋められて竹鋸で首を挽かれ処刑された罪人の供養に建てられたという伝承が残されている。

## (6) その他

郡山字北目宅地、安齋時治氏宅地内にはかつて「道祖神碑」「三ヶ月不動碑」があった。三ヶ月不動は秋保町馬場の大滝不動から持ち帰ったものだという。その跡には現在でも毎朝ご飯を供え、お参りを欠かさない。9月3日が祭日で、この日、注連縄を張り、御神酒・赤飯を供え、諏訪神社宮司の祓いをうける。正月には幣束を立て餅を供える。

## 4. 神社・仏閣

### (1) 諏訪神社

諏訪神社は1056年、陸奥守源頼義が民衆宜撫のため、はじめこの地に稲荷大神を祀るといふ。文明年中(1469～1486)、郡山村北目城主栗野助五郎大膳亮忠重の子右京之助遠江守国定、永禄年間(1554～1569)には同城主多門国重が社殿を再建したと伝える。

明治5年8月村社に列し、同40年3月幣帛供進社に指定された。同45年4月名取郡長町字砂押の深山神社、字籠ノ瀬の八雲神社を合併する。大正11年古来の境内地一円鉄道敷地に買収されたので同13年現在のところに遷座した。

諏訪神社の祭礼は礼祭(5月5日)、新嘗祭(11月3日)、祈年祭(2月18日)の3回で、その他に諏訪献膳講がある。礼祭が最大の祭りで、米・餅・野菜・果物・菓子を神饌として供える。戦前の祭りは盛大で、前夜祭も行なわれ、朝10時と夜半12時の2回、青年会により神輿が操り出した。また、名取の愛島から南部神楽を招くこともあった。

### (2) 毘沙門堂

郡山字北目にある毘沙門堂は昔、伊達氏以前にこの地を治めていた栗野氏の護持仏で、現在の郡山四丁目北目城跡付近に祀られていた。

荒町や北目には、次のような毘沙門天の伝承が残っている。

伊達政宗が北目城攻略の際、「城が落ちたら今よりもっと立派にお祭りしますからお力をお貸し下さい」と祈願したら、容易に攻落とすことが出来た。そこで政宗は毘沙門天を仙台に移す時に、「自分も何時かは栗野のように毘沙門天から裏切られて滅されるかもわからない」と考えて、荒町付近で道端の堀に棄ててしまった。それを荒町の子供達が拾いあげてかつぎまわっている所を大人達が通りかかって、見れば立派な毘沙門さんだ、もったいないことをするなといって、今の荒町満福寺の所に安置したという。それから梵鐘を奉納することになったが、どうして吊り上げようかと大人達が思案している時に子供達が寄ってきて、鐘の下から板をさしこんで何枚も重ねてだんだん高くすればいいと教えてやった。毘沙門さんは子供達の智恵を大変喜んで子供達の願いをかなえてやったという。以来子育て毘沙門として祀られたという。

1973年頃まで北目城跡付近に毘沙門堂があったが、本尊はなくお堂は空であった。国道4号線バイパスの造成の際、お堂付近も用地の対象となり、現在地に新しいお堂を造った。そこに寄進された本尊を安置し、北目の氏神として祀ることになった。祭日は5月5日である。

昔、荒町毘沙門堂の祭礼に神輿の渡御があり、郡山字北目まで神輿が渡ってきたという。

### (3) その他

郡山には寺院がない。

## 5. その他

### (1) 病退治の幣束

家内に病人が出た際行なわれた風習で、赤・紫・黄の幣束を人文程の竹に付け、村内の人目につきにくい三叉路に立てた。一緒に赤飯で作った楕円形の握り飯を、藁で編んだ器に2、3個載せて供えた。

これは道を行く人が「供えた握り飯と共に病気を受け取る。」という意味を持っており、そのためこれを見つけた時には「逃げる。」とか「蹴とばせ。」と言ったという。

### (2) 閑上街道

郡山字北目宅地、白石商店前T字路から南へ名取川に通じる道はかつて閑上街道と呼ばれた。名取川を船渡しで渡り、閑上に通じた。1930年頃まで、主に袋原の爪売りが通行したという。その道には、2基の道標が残っている。

## 参 考 文 献

- 菊池武一 『仙臺の全石文』「仙台市史」第5巻別篇3 1951.12  
 三原良吉 『仙臺民俗誌』「仙台市史」第6巻別篇4 1952.3  
 仙台市教育委員会 「郡山遺跡Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第29集 1981

表 郡山における石碑・石塔一覧

	所在地 (敬称略)	紀年号 (紀元)	刻 刻 銘	備 考
已待供養塔	仙台市郡山五丁目8 佐藤政治 畑	寛政2年 (1790)	寛政二 已待供養塔 十月	写真4 地図4
	仙台市郡山五丁目13-8 諏訪神社境内	不 明	已待供養塔	地図3
念仏供養塔	仙台市郡山字北目宅地28 菅野昭一宅地内	宝暦4年 (1754)	寶暦四甲戌天 念佛供養 八月二十七日	写真3 地図9
	仙台市郡山字北目宅地28 菅野昭一宅地内	元文元年 (1736)	元文元辰 南無阿弥 八月朔	地図9
	仙台市郡山字比目宅地28 菅野昭一宅地内	明和元年 (1764)	念佛供養塔 念佛講中 南無阿彌陀佛 明和元年八月五日	地図9

	所在地 (敬称略)	紀年号 (紀元)	刻 銘	備 考
山 神 塔	仙台市郡山五丁目13-8 諏訪神社境内	文政4年 (1821)	右 上 小牛田山神 文政四辛巳年 四月吉日建之 當町女講中 世話人 [ ] [ ]	地図3
	仙台市郡山五丁目13-8 諏訪神社境内	文政元年) (1818)	文政元戊寅年 木華開耶姫命 十月廿五日	地図3
	仙台市郡山字北目宅地	文化14年 (1817)	山 神 尊 像 文化十四 當村女 十二月 兒子多	写真7 地図10
	仙台市郡山字北目宅地55 安齋久五郎宅地内	昭和12年 (1937)	昭和十二年 山 神 旧十月	写真6 地図7
石 仏	仙台市郡山五丁目13-8 諏訪神社境内	享保21年 (1736)	享保二十一 地蔵の浮彫り 二月二十九	地図3
	仙台市郡山字北目宅地	享保16年 (1731)	石仏の浮彫り 享保十六年 九月二十四日	写真7 地図7
	仙台市郡山三丁目 赤井沢久治宅地内	不 明	地蔵の丸彫り)	写真8 地図1
古峯神社碑	仙台市郡山北目宅地2 安齋時治 畑	大正14年 (1925)	古峯神社 大正十四年一月十三日	地図11
馬頭観音碑	仙台市郡山六丁目7 東北金属工業正門前	明治39年 (1906)	明治三十九年 馬頭観世音 八月廿四日	写真9 地図5
	仙台市郡山三丁目24-8 齋藤芳雄宅地内	文政12年 (1829)	文政十二年丑年 馬頭観世音 六月十一日 右 せんだい 左 [ ]	写真10 地図2
	仙台市郡山字籠ノ瀬41 鈴木正利宅地内	大正14年 (1925)	大正十四年旧四月十五日 馬頭観世音 鈴木源四郎 建立	写真11 地図14
	仙台市郡山字吹ノ上1 安齋 誠宅地内	寛政8年 (1796)	東八ゆり阿〇江 寛政八丙辰歳 馬頭観世音 二月十九日 西へせんだい江	写真12 地図15
	仙台市郡山字吹の上2 菅原権六宅地内	昭和28年 (1953)	昭和二十八年八月十三日 馬頭観世音 菅原 権十郎	写真13 地図16
	仙台市郡山字北目前 毘沙門天王敷地内	明治32年 (1899)	明治三十二年旧七月〇〇〇 馬頭観世音 中島利春 〇	写真14 地図13
	仙台市郡山字北目前 毘沙門天王敷地内	昭和20年 (1945)	昭和二十年 馬頭観世音 十一月吉日 安齋善藏 建立	写真15 地図13
	仙台市郡山字北目前 毘沙門天王敷地内		(表) 馬頭観世音  (裏) 發 仙臺産馬畜産組合 起 仙台牛馬商組合 人	地図13

	所在地(敬称略)	紀年号 (紀元)	刻名	備考
馬頭観音碑	仙台市郡山字北目宅地44 赤井沢貞吉宅地内	昭和13年 (1938)	昭和十三年旧八月 馬頭観世音 赤井澤 貞太郎 貞次郎	写真16 地図6
	仙台市郡山字北目宅地2 安齋 時治 畑	天保10年 (1839)	天保十歳 馬頭観世音 八月吉日 願之	写真17 地図12
	仙台市郡山字穴田西	不 明	馬	地図8

	所在地(敬称略)	紀年号 (紀元)	刻銘		備考
			種 子	記 銘	
板 碑	仙台市郡山字北目宅地2 安齋 時治 畑		梵字による五輪 種子		写真18 地図25
		正安3年 (1301)	ア	正安三年 六月 六日	地図24
	仙台市郡山字北目宅地28 菅野 昭一 宅地内	応長元年 (1311)	キリーク	應長元年 <sup>辛</sup> 十月日 <sup>亥</sup>	写真19 地図24
		嘉元4年 (1306)	ア	右志者為 敬 嘉元四 <sup>丙</sup> 年 <sup>辛</sup> 十月 十七日 結衆三十人也 白	地図24
		不 明	キリーク		写真20 地図24
	仙台市郡山字北目前 毘沙門天王敷地内	正和3年 (1314)	ア	正和三年三月	地図26
		嘉暦2年 (1327)	バン	嘉暦二	地図26
	仙台市郡山三丁目 赤井沢 久治 宅地内	嘉暦2年 (1327)	キリーク	嘉暦二年 <sup>丁</sup> 卯五月二日	地図22
		不 明 (3基)	キリーク バ ン	2 基 1 基	写真21 写真22 地図22
	仙台市郡山二丁目14-9 渡辺 久治 宅地内	嘉暦2年 (1327)	イ	嘉暦二年 <sup>丁</sup> 卯五月三日	写真23 地図20
		徳治3年 (1308)	キリーク	右志者為 徳治三天四月上旬 悲母成仏也	写真23 地図20
	仙台市郡山五丁目12-8 諏訪神社境内	建武元年 (1334)	キリーク	不 建武元 幽霊 染浄土	写真24 地図23
		延慶3年 (1310)	梵字による五輪 種子	延慶三年庚戌 臘月中旬面々各々敬白	地図23
	仙台市郡山二丁目10-5 佐々木 功宅地内	嘉暦3年 (1328)	ア	干時嘉暦第三天 <sup>戊</sup> 辰拾月中旬 念佛絡衆致丁重奉造立	写真26 地図21
		不 明	キリーク	為正 玄幽霊元 三月廿五日 孝子	写真25 地図21
		不 明 (6基)	ア キリーク 不 明	1 基 1 基 4 基	地図21

# 写真

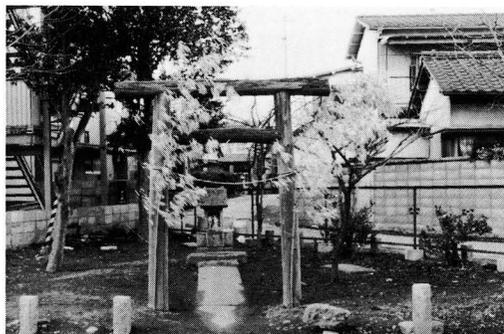


写真1 天王の祠（郡山五丁目）



写真2 ウカ様の祠（郡山五丁目）



写真3 念仏供養塔（北目宅地）



写真4 己待供養塔（郡山五丁目）



写真5 北目毘沙門天王



写真6 山神碑（北目宅地）



写真7 道標・石仏・山神碑（北目宅地）



写真8 地蔵（郡山三丁目）

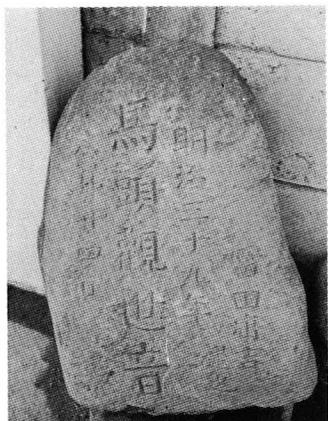


写真9 馬頭觀世音碑 (郡山六丁目)



写真10 (郡山三丁目)

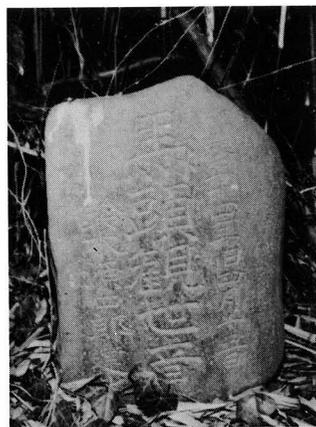


写真11 (籠ノ瀬)



写真12 (欠ノ上)

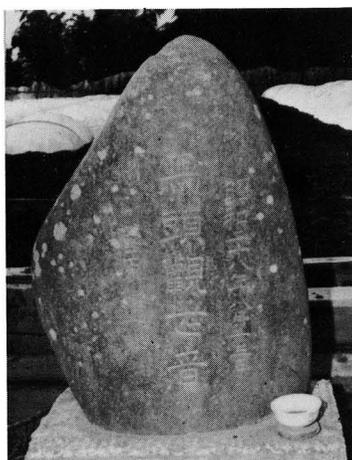


写真13 (欠ノ上)



写真14 (北目)



写真15 (北目)



写真16 (北目宅地)



写真17 (北目宅地)



写真18  
五輪種子(キャ・カ・ラ・バ・ア)



写真19            キリーク

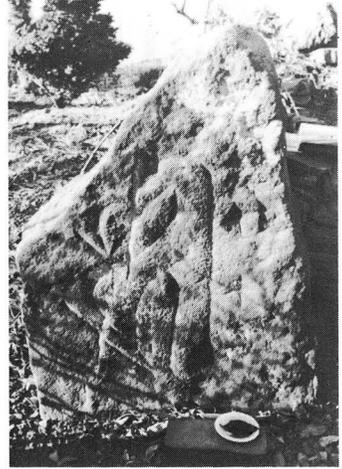


写真20            キリーク



写真21            バ   ン

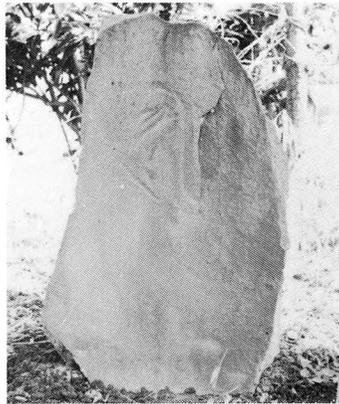


写真22            キリーク



写真23            シ   ー



写真24            キリーク



写真25            キリーク

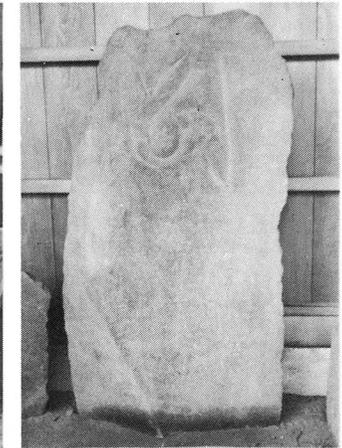
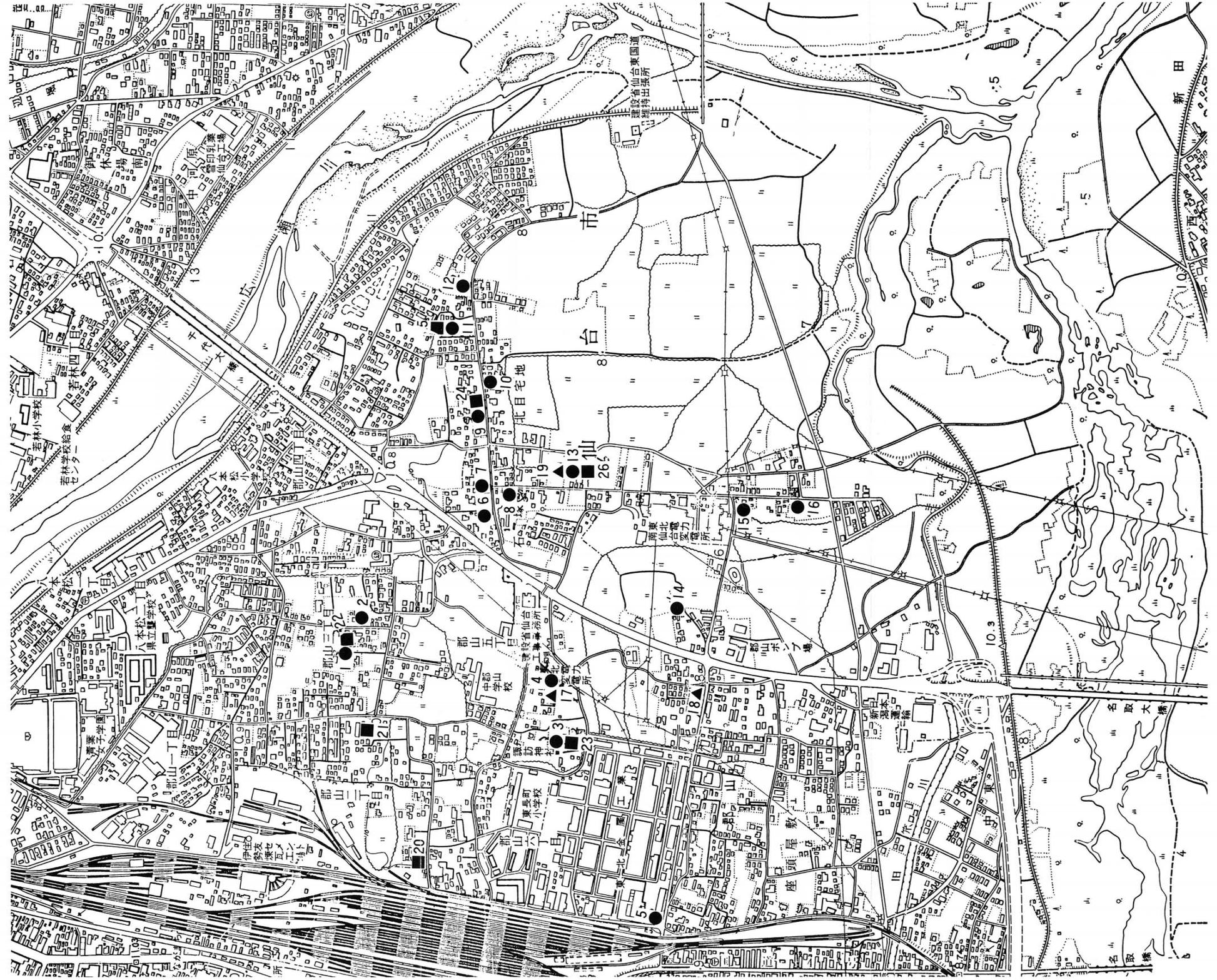


写真26            ア

郡山地区における石碑・石塔の分布地図

- 石碑・石仏 1～16
- ▲ 祠 17～19
- 板碑 20～26



# 職 員 録

# 仙台市文化財調査報告書刊行目録

社 会 教 育 課	
課 長	永 野 昌 一
主 幹	早 坂 春 一
文 化 財 管 理 係	
係 長	大 沢 隆 夫
主 事	山 口 宏
〃	渡 辺 洋 一
文 化 財 調 査 係	
係長(兼)	早 坂 春 一
教 諭	佐 藤 忠 彦
〃	渡 辺 裕 範
〃	佐 藤 正 和
主 事	加 田 中 則 一
〃	結 城 慎 一
〃	成 瀬 瀨 茂
教 諭	青 沼 一 民
主 事	柳 沢 み どり
〃	木 村 浩 二
〃	篠 原 信 彦
〃	佐 藤 洋 孝
〃	佐 藤 安 二
〃	吉 岡 恭 平
〃	工 藤 哲 司
〃	渡 部 弘 美
〃	主 濱 光 朗
〃	齋 野 裕 彦
〃	長 島 栄 一
〃	荒 井 格
派遣職員	高 橋 勝 也
嘱 託	鈴 木 実

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
- 第2集 仙台城(昭和42年3月)
- 第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
- 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
- 第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
- 第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
- 第13集 南小泉遺跡一範圍確認調査報告書一(昭和53年3月)
- 第14集 栗遺跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
- 第16集 六反田遺跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
- 第17集 北屋敷遺跡(昭和54年3月)
- 第18集 栢江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書(昭和55年3月)
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
- 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1(昭和55年3月)
- 第22集 経ヶ峯(昭和55年3月)
- 第23集 年報1(昭和55年3月)
- 第24集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
- 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
- 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
- 第28集 年報2(昭和56年3月)
- 第29集 郡山遺跡Ⅰ一昭和55年度発掘調査概報一(昭和56年3月)
- 第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報(昭和56年3月)
- 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ(昭和56年3月)
- 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
- 第33集 山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
- 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
- 第35集 南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
- 第36集 北前遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ一昭和56年度発掘調査報告書一(昭和57年3月)
- 第38集 郡山遺跡Ⅱ一昭和56年度発掘調査概報一(昭和57年3月)
- 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
- 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ(昭和57年3月)
- 第41集 年報3(昭和57年3月)
- 第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一(昭和57年3月)
- 第43集 栗遺跡(昭和57年8月)
- 第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和57年12月)
- 第45集 茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
- 第46集 郡山遺跡Ⅲ一昭和57年度発掘調査概報一(昭和58年3月)
- 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ一昭和57年度発掘調査報告書一(昭和58年3月)
- 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備調査概報(昭和58年3月)
- 第49集 仙台市文化財分布調査報告Ⅰ(昭和58年3月)

---

---

仙台市文化財調査報告書第49集

仙台市文化財分布調査報告 I

昭和 58 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町 3 - 7 - 1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

---

---

